

北九州市立大学
文学部紀要

第84号

— 目 次 —

ニコライ・トルベツコイの作品翻訳 4

芳之内 雄二 訳・解説要約 …………… 19

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2015

ニコライ・トルベツコイの作品翻訳 4

芳之内 雄二 訳・解説要約

キーワード：民族文化論

1 解説

翻訳に用いた底本は『Н.С.Трубецкой История・Культура・Язык』Москва,Прогресс, 1995である。論文『N.S.トルベツコイ公爵著「論文ウクライナ問題に寄せて」に関して』はp380-392を、『D.I.ドロシェンコへの返答』はp393-405を使用した。

前者論文はD.I.ドロシェンコ氏によるN.S.トルベツコイ論文『ウクライナ問題に寄せて』への反論であり、後者論文はトルベツコイによるドロシェンコ論文への反論である。両論文とも1928年出版である。

ドミートリー・イヴァーノビッチ・ドロシェンコ（1882-1951）は、ロシア革命後のウクライナ臨時政府で外務大臣を務めた人物であり、その後ソ連内戦期の1919年には東欧に移住し、1921-1951年まで東欧ウクライナ人移民社会で学術研究組織の中心人物の一人として、また教育研究活動家として知られる。ロシア革命後のウクライナ独立運動、民族運動の中心人物でもある。

他方、ニコライ・セルゲーヴィッチ・トルベツコイはユーラシア主義者代表として論文を発表し、その意味でロシア民族主義者として知られており政治社会運動家の側面は持つものの、プラハ言語学派創設者としての著名な言語学者、民族学・民俗学者、思想家でもある。彼の民族文化理論、言語系統理論、宗教理論、ナショナリズム論などの考えは、特に偏ってロシア民族を中心に擁護し支持するものではなく、これら理論分野の一般論としての客観性を持っていると見なせる。

まず、論文『ウクライナ問題に寄せて』の内容をはじめに紹介し、次にドロシェンコによる反論、さらにトルベツコイによる返答の内容を以下に要約する。

論文『ウクライナ問題に寄せて』は執筆者が北九州市立大学文学部紀要第81号（2012年）に翻訳と解説を発表しているのだが、これに関係するドロシェンコとトルベツコイの論文を今回新たに翻訳、要約するに当たり密接な関連を持つこれらの論文内容をまとめて解説しておくのが適当であると考えている。

『ウクライナ問題に寄せて』はトルベツコイが1927年に『ユーラシア通報 第五号』で発表したものであり、この時期はソ連当局が連邦を構成する自治体民族に社会主義理念を普及させ、人々や民族間の協調や団結を図り、社会を接着し安定させるための手段として「コレニザーツイヤ政策（土着化政策、現地化政策）」を展開した、つまり非ロシア民族の民族主義をある程度容認した時期

である。ウクライナ文化とウクライナ政治社会でまずその動きが活発化したのがそのきっかけであり、ウクライナはレーニンの共産主義、ロシアから距離を置き、独立を目指し、独特の文化を歩み始めた時期である。トルベツコイは、この動きをウクライナ分離主義とみなしつつも、ウクライナ文化の独自の創造活動に対しては一定の理解を示しつつ、排他的文化主義に陥らぬよう忠告、批判を展開している。その際、重要なキーワードとして、文化建築の上層階と下層階に関する独自理論を展開する。下層階の文化とは各地方の自然条件の違いによって衣食住など日常生活の文化に差異が生じるのが自然であり、モスクワとキエフとシベリアでの日常生活文化の差異は下層階の文化であり一定の圏内で受け入れられると見なす、他方上層階の文化とは宗教や芸術など精神文化や知的文化であり、普遍化を目指し広範囲の人々に受け入れられること、つまり文化圏拡大を目指すものである。もうひとつ重要なキーワードとして文化創造者と文化消費者（文化受容者）の言葉がある。下層階文化の場合は文化創造者とその消費者が重なり大衆であるケースが多いが、上層階文化の場合は創造者が極端に少なくなり消費者が多くなる。もちろん、文化建築構造は上層と下層からだけからなるわけではなく、互いが断絶しているわけでもない。トルベツコイがウクライナの新たな文化創造に際して、下層文化の創造は良いが、上層文化の新たな創造はこれまで歴史的に蓄積してきた共通ロシア文化の否定につながる、ロシアへの憎悪を掻き立て、何でもいいからできる限りロシアと異なるもの、特に正教を否定して無神論あるいは他の宗教を受け入れることになり、ウクライナ上層文化は酷いものになる、それは精神的伝統文化の断絶であり退廃になりかねない、と警鐘を鳴らす。

2 要約 D.I.ドロシェンコ著『N.S.トルベツコイ公爵著「論文ウクライナ問題に寄せて」に関して』

ドロシェンコ氏が批判対象としているトルベツコイ論文の主要論点を示した上でドロシェンコ氏の反論と考えを以下に要約紹介する。

地方バリエーションとしてウクライナ文化と大ロシア文化が存在する歴史の始まりは、トルベツコイ氏が指摘する15世紀でなく13世紀からである、ウクライナ民族と大ロシア民族の起源の共通性は否定しない、キエフ・ルーシ時代の12世紀半ばまで共通性があったが、すでに北部と南部では言語と生活習慣の差異あり、北部の政治文化活動中心地は当初はキエフの植民地であった。大ロシア民族は基本的構成民族としてノブゴロド・ルーシ及びヴァーチチ族と並んで南ロシアの入植者とフィン要素の混入で組成されており、政治活動や生活様式のみならず文化分野においても南ロシア（ウクライナ）文化と明確な差異を發揮するようになった。公一族と政治システムの一致により、差異は地域的なもの以上には広がらなかったが、13世紀前半のモンゴルによる壊滅的侵略とその後の統治により大ロシアとウクライナにおける文化分野の発展は明確に境界線が引かれた。

トルベツコイ氏は二つの文化の類似性をどちらかと言うと強調しているが、大ロシア文化はウクライナ文化とは非常に異なっている、ウクライナは13世紀（ガリツィア・ヴォリニ時代、その後のリトワ公国時代）からは直接的に、16世紀からはポーランド経由で西洋との交流を維持した、ルネッサンスや宗教改革を経験し、ドイツやイタリアの大学に自分たちの子息を派遣し、西洋モデルによって教育事業を組織した。

大ロシア文化とウクライナ文化の差異はトルベツコイ公爵が考える文学・芸術分野よりも広くあらゆる生活活動面に行きわたっていた。しかも上層社会のみでなく大衆社会の差異の方が標準語、音楽及び絵画の分野における差異よりもはるかに重要で意義が大きかった。

17世紀後半のモスクワとウクライナにおける日常生活文化を比較すると法概念と裁判手順、家族関係、家庭での女性の立場において大きな差異があった。モスクワでは拷問と答が支配的でありそれはモンゴル支配の負の遺産であるが、ウクライナでは人民公開裁判で刑が限定され罰金と教会懺悔に止めている。

18世紀前半の新首都ペテルブルグ建設に当たりロシア政府は政治・経済・文化などあらゆる分野でのウクライナ抑圧、搾取政策をとったため、ウクライナは辺鄙な片田舎になり、ウクライナ文化は活力を失った。もっとも、19世紀半ば以前にはウクライナ人インテリによる独自文化創造の喪失はさほど生じてはいない。18世紀のウクライナ人がペテルブルグ勤務や文学で立身出世が可能であり、そうした成功者でウクライナへの帰属を忘却する者は稀だった。その際に維持された意識は大ロシア人に対するウクライナ人の文化的優越感であった。

ウクライナ文学の原動力となっていたのは単に社会的モチーフだけではない、ウクライナ文学復興そのものをウクライナ人は民族と国家の自立志向と思っていた。19世紀前半のロシア語はウクライナ分離主義理念を普及する手段でもあった。

トルベツコイ公爵はウクライナ文化と大ロシア文化の相互関係に言及する際常に、実は12世紀後半に政治的関係と文化的交流を開始したのはウクライナ全体ではなくてヘトマンシチナと呼ばれるドニエプル左岸とモスクワであったという事実に向けていない。ドニエプル右岸全体はポーランド崩壊の1793年までポーランド統治下にあり、ガリツィアは一度もロシア統治下に入ったことがなくこれらの土地ではドニエプル左岸とは全く別の文化的結びつきがありそこで支配的だったのはポーランド文化である。

トルベツコイ公爵はウクライナ人用処方箋「自宅用の文学」を繰り返す、ウクライナ語による平易な科学、優美なウクライナ文学、特に詩作品も発展させれば良い、だが主に大衆生活を主題とするものに限る、だが大衆的レベルよりも上のもの、知識人の高度な欲求を満たすべきものは全て共通ロシア語を利用すべきである、と言う。

1918年にウクライナ国家が生まれた時、ウクライナ科学アカデミーの創立者となったのはペテル

ブルグ科学アカデミー会員ベルナドスキーだった、また初期のアカデミー会員には、ウクライナ国立大学教授と並んで多くの教授と学者がいた。彼らをウクライナ学術機関に導き入れたのは恐怖や暴力ではなかった。なぜなら、ヘトマン政府はロシア文化に対していかなる暴力も使わなかったからである。彼らは全て上層階文化としてウクライナ文化を自主的に選択した。

現在ウクライナ住民はすでにウクライナ文化を選択した、そしてこの文化は、見ての通り、その「下層階」を具体的民族基盤に順応させている。トルベツコイ公爵は、この文化の「上層階」はウクライナ知識人上層の高度欲求に合致しない、そこでこれら知識人上層の大部分は自立的ウクライナ文化の選択を望まない、と懸念する。なるほどロシア語で教育を受けた彼ら旧世代は自らの考え方を变えることは難しい。しかし、彼らに代って新世代知識人が出てくる、彼らは自らをウクライナ文化に帰属する人間以外に自己認識することはないだろう。1-2世代後には、彼らは共通ロシア文化の担い手となる旧知識人に当然取って代わることになり、共通ロシア文化継承問題は自然に解決される。

トルベツコイ公爵は、ウクライナ文化が勝利すればその文化レベル全体が低下する、と危惧する。彼は自立的ウクライナ文化建築には満足しうる上層階建築が出来る可能性を信じない。ウクライナ文化は共通ロシア文化の豊かな伝統を持つことはない、と見なしている。反論として、ウクライナ文化が建設されているのは無人の土地ではないことを指摘しておく。この文化は千年前のウラジーミルとヤロスラフの時代にまで溯る、この文化は公爵自身の認定によれば17世紀にモスクワによって摂取され、共通ロシア文化の役割を持って発展し続けた。ウクライナ人は、19世紀の100年の期間だけでもこの共通ロシア文化に自らがどれだけ広範囲な貢献をし、共通ロシア文化の伝統作りをどれだけ促進してきたかを認識し、そして自分たちの寄与を拒否しようとは思っていない。

トルベツコイ公爵はウクライナ文化を選択するのは偏見を持っている人物のみ、あるいは選択の自由が制限されている場合だ、と主張する。自主的にウクライナ文化を選択している人々は無能あるいは平凡な文化創造者、視野の狭い狂信的な地方の排外主義者のみだ、とも述べている。

公爵は新ウクライナ文化が共通ロシア文化と何の共通性も持たないと述べているが、何を根拠としているのか。たとえ、ウクライナ人がわざと文化面でロシア的なものすべてと袂を分かち異常な目的を立てたとしても、その達成は全く不可能であろう。なぜなら、起源、宗教、何世紀もの同居生活の共通性の絆が今も今後も常に威力を発揮することになるからだ。だが、その他にそうした交流の断絶は、ウクライナ人が関与、蓄積したウクライナの歴史・人文学・民族学に関わる文化的価値全てを放棄することを意味するのだが、そうした選択はありえない。なぜなら、おびたしい数のウクライナ研究者がロシア語で記述したものを全てをウクライナ語に翻訳はしないであろう。

ウクライナ文化が創造され発展してきたのは決してロシア文化への敵意や反抗からではなく、独自の明確な課題を追い求めてきたからだ。民族的なものを用いて全人類的なものへの移行を追求し

た。ロシア文化の中にあるより良いものをウクライナ人はまず借用し身に付けた。

ロシア革命後に独立ウクライナ国家におけるウクライナ文化発展の完全な自由が訪れ、ウクライナ語が国家言語となり、ウクライナ文化の前に広い地平線が開けた時、ウクライナ政権はロシア語、ロシア文化を抑圧迫害しなかった。ロシア語使用の旧大学を閉鎖しなかったし、ロシア語中等学校を改編もしなかった。

ウクライナ文化がロシア文化とのあらゆる結びつきを断ち、ロシア文化と「何の共通性も」持たぬようにするには、文化面で極めて多くの共通の絆がウクライナ人とロシア人とを結び付けていることを繰り返しておく。

トルベツコイ公爵は上層階文化を首尾よく発展させる上で大きな役割を持っているのは当該文化の担い手である民族人口規模である、と述べている。当該文化の担い手の人口が大きいほど、その文化の担い手の中における才能ある人々が生まれる絶対数は多くなると述べている、だがこの論拠は我々を当惑させる。なぜなら、ある民族の数の多さは才能ある人々の数の多さを条件付けるものではなく、逆もまた同様である。

むしろ、ウクライナ自身とその文化的発展に役立つようにすること、「狭量で狂信的な地方の排外主義者」がウクライナ社会の有力者にならぬようにすること、は当然である。あるウクライナ人グループによってこの種の「文化プログラム」を遂行する危険な状況が存在し、残念ながら今でもそうした欲求を持った人々がいることを認めざるを得ない。

ガリツアのウクライナ人にとってロシア文化はいつも縁遠く、よそものであったがトルベツコイ公爵は彼らの「民族自意識の異常さ」をまったく根拠なく非難している。もしも、彼がより近くより公平にガリツアとの間柄を見極めていれば、ガリツア・ウクライナ人の民族自意識を奇形にしたのは彼らの中にモスクワ最良を植えつけたからだ、ということ認めるはずだ。

トルベツコイ公爵自身はウクライナの将来の文化的創造が彼にとって望ましい多層階建築となることをあまり確信していないらしい。彼は、上層階と下層階の他に中間的な階を想定している、その中間層では「下層階」が共通ロシア文化のウクライナ個別化を成し、「中間諸階層」が過渡的なものを成し、「上層諸階」は共通ロシア文化支配のために独占的に割り当てられている。

トルベツコイ公爵が民族自意識の「正しい」発展という言う時、それは一体何を意味しているのか、なぜそうした発展が文化創造における自制に結びつくのか理解困難である。今のところウクライナ人は、ウクライナ民族文化の一階建て建物の上に多層階の様々な種類の文化財建設の方を望んでいる。ウクライナ人は上層社会と下層社会の文化的断絶のせいであまりに長く苦しんできた。一時的にでも上層社会が低下して、代りに中層社会レベルが上層すればいいのだが、それはすぐに前のよりもさらに高く成長する新たな芽を生むだろう。

3 要約 N.S.トルベツコイ著『**Д.И.**ドロシェンコ氏への返答』

トルベツコイ氏が批判対象としているドロシェンコ論文の主要論点を示した上でトルベツコイ氏の反論と考えを以下に要約紹介する。

D.I.ドロシェンコ教授の論文は冷静な学術的調子で終始一貫しており、好意的な批判内容であったが、彼の批判の欠点は、ユーラシア主義思想全体の考えを理解していないため多くの誤解を生んでいることにある。

ユーラシア主義の主要スローガンの一つはインテリと大衆の間の断絶排除であり、ユーラシア主義者はピョートル一世によって実施された西欧化＝ロシア文化破壊政策を批判し、ロシアインテリ旧世代を盲目的ヨーロッパ崇拜者として非難する。その主な理由は西欧化がロシア文化の「上層階」と「下層階」との間に深い溝を作り出し、インテリを大衆から断絶させ、ロシア民族全体の文化的統一を壊したことにある。

ドロシェンコ氏の思想は典型的な西欧主義者のものである、だからユーラシア主義の考えを軽視する結果になっているのであろう。彼は、ウクライナ人はアジアステップとの数百年の闘争において文明世界に大いなる貢献を果たしてきた民族だ、と述べているが、「文明世界」とはロマンス・ゲルマン世界と理解される。我々ユーラシア主義者にはアジアステップも同じく「文明世界」である。

15-17世紀のウクライナ文化も我々には貴重であるが、それは決してそのヨーロッパ的特質、ヒューマンイズムの要素と宗教改革、あるいはカトリックのスコラ哲学によるものでもまったくくない。ウクライナ文化がロシア正教への忠誠を維持し正教を守ったことで貴重である。

私はピョートル以前のモスクワ文化を愛し高く評価しているので個人的愛着を抑制し、あらゆる判断評価を控えて事実確認のみに努めた。ドロシェンコ氏は西欧主義者の習い性になっている判断評価を断念するのがはるかに困難であるようだ、彼はモスクワ・ルーシについて、鞭打ち拷問、裁判手続き、独裁統治、文字と儀式への狂信など、月並みな西欧主義者の批判を述べ、当時のウクライナは地上の楽園、自由と啓蒙の王国と見なしているようだ。こうしたアプローチはあまりに皮相的であり実りがないように我々には思える、なぜなら結論があらかじめ定められているからだ。

ウクライナ人にとって絶対主義国家体制は異質で縁遠いものだった、それは彼らにとってはポーランドによる国家支配と結びつき、抑圧への自己防衛を意味した。ウクライナ人は国家抑圧からいつも逃れることで発展してきたのでアナキーに近く、一定の国家極小主義傾向があった。逆に、大ロシア人は国家建設プロセスや国家統合の可能性と使命意識を抱きながら成長し発展したので、絶対主義国家体制は彼らにとって独自の民族的事業、使命であった。そこで、彼らにとって一定の国家至上主義、やむを得ず国家権力の無慈悲さと結びついた国家全体主義は自然なものであった。

モスクワがその国家体制パトスによってウクライナ人の反発を買い同時に惹きつけたとすれば、

ウクライナは全く同じくモスクワっ子を表面的に洗練された西欧様式の教養パトスで反発を買い同時に惹きつけた。ドロシェンコ教授はモスクワの国家至上主義パトス全てを圧制支配といった西欧主義者の決まり文句で単純化して説明する。同じように17世紀のウクライナの教養パトスを反発要素として扱えば、ウクライナ神学校が理想からは程遠く、ウクライナ啓蒙教育が極めてスコラ哲学的の性質を持ち、表面だけが立派なそのシステムは実生活からは程遠かったことを自覚しておくべきである。もしも、古いモスクワ文化を拷問、笞刑、無教育で単純に説明するのなら、ウクライナ文化をうぬぼれの強い神学校的教条主義とコサック本營のアナーキズムで簡単に説明することができる。当該ケースでは17世紀ロシア文化の二つのバリエーションの相互関係において、反発も引力も存在したが、引力の方が強かったのかどうかを確認しなければならない。そして引力が強かったのは、全ロシア統一と民族的課題の共通性の意識が存在したためであった。モスクワっ子にもウクライナ人にも民族問題は第一に宗教的なものであり、基本的民族課題はロシア正教の純粋性維持と思われていた。ウクライナ人は、自らの正教とロシア性維持のため、そしてポーランド圧政から自らを守るためには強固な国家体制が彼らには不足している、と考えた。他方、モスクワの指導的社會層は、正教の純粋性維持のためには、ウクライナが誇る教養がモスクワっ子には不足している、と考えた。このように、大ロシアとウクライナは、ある全ロシア的課題遂行のために反発力を克服して、互いを頼りとし相互に補い合うべきであった。

こうした全ロシア的課題の存在意識、つまり全ロシア的統一の意識は歴史的に重要な事実である。この意識と同時にロシア両種族の特色と特性の意識も存在したことは疑うべくもない。だが、まさに両種族の統合（つまり全体の統合意識と各部分の特色意識）は一つの民族的個性の二つの個別化、ロシア文化の二つのバリエーションについて語ることを可能にする。ドロシェンコ教授は、あたかも私が二つのバリエーション文化の相違の深さを軽く見て、言語と文学上の差異に単純化している、と理由もなく見なしている。仮に私が文学の問題に若干詳しく立ち入っているとすればこの文化分野が私には親しいからである。同じく、私がロシア文化の二つのバリエーションの相違出現が15世紀だと見なしている、とするのは間違っている。差異が発生したのははるかに早期であり、確かに12世紀後半である。だがこの差異が顕著になったのは、一方では、西ロシアでポーランドの影響力が強まった時期からであり、他方では、全東ロシアがモスクワ権力の支配下で最終的に統一されてからのこと、つまり、17世紀半ばには差異は著しく深まった、と私は述べている。

ピョートル後時代の共通ロシア文化は、ピョートル前のウクライナ文化とモスクワ文化の妥協の産物であった。そうした妥協の際の常として互いがその貴重な一部を犠牲にした。大ロシア人は自らの精神文化の多くの伝統を捨てた、ウクライナ人は国家極小主義を捨てなければならなかった。

ドロシェンコ教授は、ウクライナ文化と大ロシア文化との間にヒエラルヒー関係を確立して、ウクライナ文化を下層社会文化とし大ロシア文化を上層社会文化にすることを私があたかも望んでい

るが如く解釈した。ドロシェンコ教授は、「民族的なものを用いて全人類的なものへ移行すること」をウクライナ文化の肯定的課題と見なしている。ここではおそらく、我々は意見が食い違っている。私は、全人類文化の可能性を否定する。同時にまた私は、各個人は常に民族集団のメンバーであり、そしてこの民族集団もまたより大規模な多民族的集団メンバーでもあると考えている。文化創造に際して、才能豊かな創造者は誰もが可能な限り大きな文化主体のための創造を目指すものである。それは、仮に全人類の志向と名付けることが出来る。全人類的なものへの志向は小さな閉鎖的文化単位からより大きく開かれた文化単位を包含するものへと上昇志向するはずだ。その際、この上昇は段階的なものである、なぜなら、最小文化単位と最大文化単位との間には、あるものが別のものに同心円的に包含される「中間的」単位がさらに多く存在するからである。ウクライナ文化に関して言えば、このことは、ウクライナ文化にとって「民族的な道から全人類的な道へ至る」には共通ロシア文化を経由することを意味する。ピョートル一世時代からの共通ロシア文化はヨーロッパ文化に参加するようになり、そしてロシアインテリにとってはすべてのヨーロッパ的なものが全人類的なものであった。本来の意味で全人類的なものになるためには、ウクライナ人、大ロシア人あるいはベラルシア人によって創造されたあらゆる文化的価値はまずは共通ロシア的なものであるべきだった。我々、ユーラシア人は、将来にはロシア文化がヨーロッパ文化の一つでなくなり、独特の共通ユーラシア文化に参加することを予期し期待する。その時にはウクライナ文化から共通文化へ至る道はヨーロッパ人でなくユーラシア人の道経由であり、共通ロシア文化を経由して道が通ることになる。要するに、大きな道へ出ることを望むウクライナ人にとって共通ロシア文化は、いずれにせよ、避けて通れない。民族的なものから全人類的なものへの移行を望むウクライナ人は、その第一歩としてウクライナ的なものから共通ロシア的なものへの移行であることを覚えておく必要がある。

共通ロシア文化への恐れは多くのウクライナ人にとって、むしろ言葉への恐れである。実際には共通ロシア文化の要求とは何に帰着するであろう。いわゆる東スラブ人の民族諸文化がいかなる他文化よりもお互いにより近くなることであろう。その親密性は、特に地域事情・地方条件との結びつきが極めて弱い文化価値及び文化分野においては特に強くなるであろう。最後に、前述の特に地域事情・地方条件と全く無関係な文化分野の親密性は、個々の「東スラブ諸種族」文化間に不要な隔壁を設けることで歯止めをかけられないであろう。これら全てのことは全く当然のことであり、東スラブ族の性質そのものから発していることである。

ドロシェンコ教授は、「ロシア文化」（つまり大ロシア文化）とウクライナ文化は互いに他のいかなる文化よりもより近くあるべきであることを否定しない。彼は、現代ウクライナ文化がピョートル時代後の共通ロシア文化の伝統を継承すべきであると認めるが、継承すべきものとしてウクライナ出身者によって創造された共通ロシア文化財のみに制限する。

ロシア文化の共通文脈を拒否するのは、人類共通の道への出口を閉ざすに等しい。それは非常な自己規制であり、自己去勢のようなものである。

ドロシェンコ教授の主要論拠の一つは事実上すでに解決済みの議論への言及である、国民学校から大学までウクライナ語で学んだウクライナ知識人の新たな青年層は自らをウクライナ文化人以外と見なすはずがない、そして昔のウクライナ知識人からさらに2-3世代後の時代には共通ロシア的意義は跡形もなくなるであろう、と言うものである。これに対する回答として、1876年政令作成者の意図とその予期せぬ結果を想像すれば良い。ウクライナ語使用を禁じる政令により、2-3世代後の時代になればウクライナ知識人が自らを共通ロシア文化人と自覚することは無くなりウクライナ問題は自ずと解決するだろう、と政令作成者は思っていたであろう。

ウクライナ民族自意識は必ずやその中に両要素、共通ロシア的なものと個別ウクライナ的なものを含むはずである（ロシア民族自意識も同様）。それは本性であり、権力の圧制によりこれを抑えようとしても抑圧は成功しない、なぜなら「本性をドアの外に追い出しても、それは窓から入り込む（ロシアの諺）」から、「本性を人為的に抑圧すれば歪み傷つけられた自意識を生むことになり」、早晚本性はその本領を取り戻すと説明する。そして、真の文化創造活動はこうした本性をゆがめたり傷つけたりすることが無くなり、各民族が自分自身を認識して自分自身になる、つまりウクライナ人だけでなくロシア人でもある、ロシア人だけでなくウクライナ人でもある可能性を獲得する時点からスタートする。その時に共通ロシア人及び個別ウクライナ人としてのウクライナ民族個性の存在が文化においても自分に取って相応しい形を見出すはずである。標準的ウクライナ人の共通ロシア意識は、「上層階」文化領域では特に強いので、ウクライナ民族個性の共通ロシア人の顔はまさにこの文化領域面できれいに現れるだろう。

文化建築の上層階で使用される言語システムは当該民族全体の多様性に応じて下層階で使用される言語システムに較べると区別が少ないはずである。その際、区別は言語の語彙面に主に関係するものであり、文体とシンタクス面では程度が少なくなり、形態変化と音声面ではほとんど関係ない。ところが実は現在では全く逆の現象が生じている。ウクライナ文学作品、庶民生活を題材にした物語あるいは庶民的文体の詩作品は大ロシア知識人にとって読んで理解するのが容易であるが、ウクライナ語で書かれた学術書を理解するのはブルガリア語やポーランド語で書かれているものよりも遙かに難しい。こうしたことは学術用語及び抽象的概念を意味する単語によって生じている、つまり比較的限定された知識人上層によって造られている語彙が共通ロシア語から可能な限り分離するようにとの意識的な目的で造られて来たからである。ドロシェンコ教授がなんと言おうとも、ウクライナ学術語、標準語はこれまで共通ロシア文化からの主要な分離手段であった。ウクライナ民族運動の知的上層部が身につけた学術用語、抽象的及び特殊な標準用語の創造・生産方法は、ロシア文化から何としても分離してウクライナ教養人とロシア教養人が交流し互いに知り合うことを可能

な限り困難にしようとする意図によるものである。将来ウクライナの知的上層社会がこの自然な道に歩みを進め、そこでウクライナ学術・標準用語が現在あるような狭量な民族自己規制と分離の道具であることを止め、地方造語者の実験活動の場であることを止め、真の大文化を創造する道具となるよう期待する。

ドロシェンコ教授は民族人口とその民族の中で生まれる有能者数の正比例について当惑している。私は、「当該文化の担い手の数が多くなれば、＜他の条件が同じであれば＞その文化の担い手の中から有能な人々が誕生する絶対数が増加する」と述べたのである。＜他の条件が同じであれば＞という重要な強調箇所をドロシェンコ氏は無視している。

「自己認識の正常な発展」とは、ウクライナ人にとってそれは何よりもまず自分たちがウクライナ人だけでなくロシア人でもあること、ロシア人だけでなくウクライナ人でもあること、ウクライナ性の無いロシア人はあり得ない、との自己認識に基づく発展の意味である。

「そのような正常な発展が文化創造における自己規制に結びつくのか」については何ら言及しておらず、正常な自己認識とはまさに自己規制に結びつかぬものであると回答する。

D.I.ドロシェンコ著『N.S.トルベツコイ公爵著「論文ウクライナ問題に寄せて」に関して』

ロシア側からウクライナ問題を扱った文献の中で、公爵トルベツコイ教授の論文は冷静さで際立っている。ロシア側もウクライナ側もウクライナ問題を議論するに際して、一般に、アカデミックな冷静さと学術的公平さを保つことは稀である。トルベツコイ公爵は、「このウクライナ問題のケースでは政治問題と文化問題の関係は必然的ではない」と見なし、この問題の政治的側面には触れていないのは、全く正しいと思う。「ドイツ人種族のすべてが一つの国家に統合されていないにもかかわらず全ドイツ文化が存在することを、われわれは知っている。他方、かなり以前に国家の独立性が失われているにもかかわらずインド人（ヒンズー教徒）が持ち前の自立的な文化を保持していることを、われわれは知っている。それゆえに、ウクライナ文化と全ロシア文化に関する問題もウクライナと大ロシアの間の政治的及び法治国家の相互関係の問題とは別に検討することが可能でありそうすべきである。」

全くその通りである。ウクライナの独立国家志向は民族文化的利害よりも政治的及び社会経済的利害によってはるかに多く指図されている。そして、我々は、この独立志向なるものは、もしもウクライナ人とロシア人が全く同じ言語を話しながらも個別のウクライナ文学が何ら存在しない場合でさえ出現するであろう、と考えている。人類学的な一定の差異はもとより歴史的発展の違いによって条件付けられている言語と文化の差異は、もちろん、ロシアからの（そしてポーランドからの）ウクライナの政治的分離主義をもっぱら促進するのだが、相違それ自体は分離主義の原因ではない。

つまり、トルベツコイ公爵は「ウクライナ問題」を政治の外で検討することを望んでおり、ウクライナ語、ウクライナ文学及びウクライナ科学¹の将来の発展への希望と妥当性の視点でこの問題を扱おうとしている。尊敬すべき著者によって提起された問題は、肯定的な意味において、生活自体によって解決されると我々は考えているので、論争はいくらか後のことになる。だが、我々はこの問題の理論的立て方に少なからぬ意義を認めている、冷静でアカデミックな形でトルベツコイ公爵が論じているからである。問題の歴史的叙述における著者の基本的主張を受け入れつつも一定の保留条件を含み、しかしその結論には同意できぬので、著者の論文に一定の事実に修正を加えることを我々は望む。トルベツコイ公爵の叙述は概していくらか独断的（教条的）で圧縮的である、おそらく、実例の挿入が叙述のいわゆる圧縮文体を乱しているのであろう。しかし、それでも事の事実面により多くの注意を向ける必要があると我々は思っている、なぜなら、事実は尊敬すべき著者の基本的主張と結論についても有利にはならないと、考えるからである。

著者は自らの論述において、ピョートル時代以前（つまり17世紀初期）までは一つの「共通ロシア」文化の「二つのバリエーション、二つの個性」としてウクライナ文化と大ロシア文化が存在していた、と

1 トルベツコイ公爵はこれら3つの概念を若干狭いウクライナ文化概念にまとめている。

の見解に立脚している。15、16世紀及び17世紀前半の間は、ウクライナ文化とモスクワ文化は異なる道筋をたどって発展したため、17世紀半ばには二つの文化間の差異はきわめて深いものになった。ウクライナ文化はすでにヨーロッパ文化のいくらかの要素を吸収し（ヨーロッパ文化のポーランド・バリエント）、将来の発展傾向はこの進路において発揮された。他方、モスクワ文化はヨーロッパ嫌いの特徴を持ち、自足傾向を発揮した。ピョートル1世はロシア文化（つまりモスクワ文化）の欧化を目的として掲げ、ロシア文化の大ロシア・バリエントを完全に根絶し破壊しようと努めた、そして「ウクライナ・バリエントを将来の発展のための起点となるロシア文化の唯一のバリエントとしたのである。」

こうして、古いモスクワ文化はピョートル時代に死滅した。ピョートル時代以降にロシアに存在し発展している文化はキエフ文化、ウクライナ文化の有機的直接的な連続物である。さらに続けて、トルベツコイ公爵は、18-19世紀のロシア文学は古いモスクワ文化でなくウクライナ文化の受容と発展であることを証明する文学と芸術分野の現象について論じている。

この主張によって著者がその後の結論を出している点に移る前に、この主張について少し検討して見よう。共通ロシア文化の二つのバリエントの相違を問題にする場合、この差異の始まりを15世紀ではなく少なくともさらに200年前に、つまり13世紀までに、北部のボルガ川上流とオカ川上流地域に大ロシア民族が形成され始めた時代までさかのぼる必要がある、と我々には思われる。南ロシア（ウクライナ）民族と北ロシア（大ロシア）民族の起源の共通性を否定しない、キエフ・ルーシ時代の少なくとも12世紀半ばまでいけば共通性があったことを否定はしないが、すでに北部と南部では言語と生活習慣の一定の差異が存在しており、北部の新たな政治文化活動の中心地は当初はキエフに対する植民地であったこと、政治的首都の意義をすぐに要求表明した植民地であったことは否定できない。大ロシア民族は基本的構成要素としてのノブゴロド・ルーシ及びヴァーチチ族と並んで南ロシアからの入植者と一定のフィン要素の混入によって（南ロシアのチュルク要素の混入と同様に）組成されており、政治活動や生活様式の分野だけでなく文化分野においても南ロシア（ウクライナ）文化と明確な差異をすぐに発揮するようになったことは否定できない。おそらく、公一族と政治システムの一致があったために、この差異はその後、地域的差異以上には広がらなかったようであるが、1237-1240年のタタールによる壊滅的侵略とその直接的政治的帰結によって、その後の文化発展の意味で、両民族にはっきりした境界線が引かれた。後に、モスクワによって統合された北ルーシは西洋よりも東洋からの影響を多く受けつつ、持ち前の古いビザンチンの遺産に依拠して自らの文化を発展させた（もちろん、北の共和国、特にノブゴロドとプスコフの存在を考慮すれば西洋の影響も否定はできない）。この文化はその内容からすれば、長く見なされていたほどひどく不幸なものではなかった、例えば芸術に関しては、スターソフ（訳注 **Владимир Васильевич Стасов** 1824-1906、芸術評論家）とコンダコフ（訳注 **Никодем Павлович Кондаков** 1844-1925、芸術史家）の後には、古い大ロシアの絵画と建築の豊かさと独特の美しさを誰一人として否定しようとしないうであらう。だが、この文化は南西ルー

シ、つまりウクライナ文化とは非常に異なっている、ウクライナは当初（ガリツイア・ヴォリニ時代、その後のリトワ公国時代）は直接的に、16世紀からはポーランド経由で西洋との交流を維持し、ルネッサンスや宗教改革を経験し、ドイツやイタリアの大学に自分たちの子息を派遣し、西洋モデルによって教育事業を組織し、ラテン・イエズス会の侵入に対して彼らから輸入した武器で自らの東方正教を擁護してきた。

二つの文化バリエーションの差異が始まったのは、従って、トルベツコイ公爵が指摘する時期よりも早だけでなく、それは17世紀半ばまでに、つまりウクライナとモスクワの政治的共生が始まった時期までに始まっており、公爵が考える文学と芸術分野よりもはるかに広くあらゆる生活活動面に行きわたっていた。しかもたぶん、支配的上層社会のみでなく人民大衆の中における一般的文化気風の差異の方が、トルベツコイ公爵が強調する標準語、音楽及び絵画の分野における差異よりもはるかに重要で意義が大きかった。尊敬すべき著者は国際条約締結に際してウクライナ団長によって提示された基本要件は勿論知っていた。例えば、1658年のポーランドとのガジャチ条約（訳注 **гадячкий договoр**、大幅な自治権を獲得してポーランドと合併する内容）におけるウクライナでの二大学開設、教育・研究・出版さらには教会事業分野の自由制度導入の条項を思い起こしてほしい、1670年のポーランドとの交渉のためコサック首領ドロシェンコによる大使あて訓令中に同一要求があるのを、我々は知っている。そこでは、ウクライナ若者のための中等学校開設、出版と学術研究の自由について述べられている。さらに思い起こしてほしいのは、ピョートル（1世）が若いモスクワっ子を外国留学を強制したのに対して、ウクライナでは社会上層だけでなく、平民やコサックの子息もすでに全く自発的に学問のために異郷の地を目指していたことである。ゲッチンゲン、ケーニヒスブルグ、ライプチヒ、シュトゥットガルト、ベルリン、ストラスブルグ、パリ、ライデン、ローマなどは17世紀末からウクライナの若者が当地の大学や寄宿制中等学校やその他教育機関で学んだ都市である。さらに付け加えれば、1748年の人口調査はヘトマンシチナの7連隊²のみの領土で記録されたものであり人民学校866校（住民746人当たり1校）は、スロボダ・ウクライナ領（訳注 ハリコフ、ドネツクなどの東部ウクライナの歴史地理名称）における1732年の124校（住民2500人当たり1校）よりはるかに多かった。18世紀半ばに導入されたコサック子弟に対する読書き・軍事教練の全員義務教育を想起すれば、また当時のザポロージェ本営で少年150人当たり1校があったことを指摘すれば、ウクライナ文化側面の一つとしてコサック・ウクライナにおける人民教育のかなり明確な状況が得られる、と思う。だが、この状況はこの時代のモスクワやピョートル帝国において我々が目にするものと異なっている。17世紀後半のモスクワとウクライナにおける内面的生活様式をいくらかなりとも詳しく調べれば誰でも、両

2 ヘトマンシチナ（訳注 17-18世紀にコサック首領が統治したドニエプル左岸ウクライナ地域の公式名称）は周知のように、後のチェルニゴフ県とボルタワ県二つだけの領域に納まる10連隊管区に分かれていた。A.M.ラザレフスキーが発見した統計資料は7連隊にしか言及していない。

者間における法概念と裁判手順、日常生活様式、家族関係、家庭における女性の立場において大きな差異がはっきりと分かる。モスクワでは拷問と答が支配的であることを我々は目にする、答打ちによる強制的債務取立てはタタール支配の負の遺産であり、その裁判手続きを伝統的なものにした、奴隷抹殺と皇帝に対しては全員が等しく無権利といった平等、文字と儀式への狂信、農奴の束縛性、女性の閉鎖性などを目にする。こうしたことは全てウクライナには似ていない、ウクライナでは人民公開裁判（リトニアの地位によって）が当然の重刑を科することを控え、罰金と教会懺悔³に止めている、ウクライナではモスクワ式裁判の残酷さに対する恐れと嫌悪が支配的である⁴、ウクライナではプロテスタントから正教に改宗したドイツ人ギーゼリとゼルニコフが聖職者ヒエラルキーで高位ポストに就任し、ローマのイエズス教団アカデミーで受けた教育がキエフ・アカデミーでの講座担当の障害になっていない、ウクライナでは女性は完全な権利を持った家族・社会のメンバーであり、ウクライナのヘトマン夫人は夫の留守中には自らが布告を出し、隊長夫人は通行人に保護証書を発行し彼らのために護衛隊をつけてやる。我々が知っている数百の遺言状を見てみると、17世紀のウクライナ女性は自らの財産運用の際に文化目的と慈善目的を忘れることはほとんどなかったことが分かる。そして、たぶん、シリアの長輔祭パブロ・アレップスキーの率直な回想記ほど二つの文化バリエーションの差異を実に明瞭に特徴づけるものは他にないであろう。パブロは最初1654年にウクライナを訪問し、モスクワに丸2年滞在し、帰途に際して再度1656年にウクライナに立ち寄り、日記に以下のように記している。

我々はドニエプル河岸に到着して、キエフへ自分たちの消息を知らせた。我々がこの繁栄した土地に足を踏み入れるとすぐに、喜びが我々の心を満たし、我々の胸は広くなり、神に感謝を捧げた。モスクワで我々が過ごした2年間は、まるで我々の胸に錠が掛けられた如くであった。我々の思考はいつも抑圧されていた、なぜならモスクワでは地元の住民以外は誰一人自らを自由で陽気に感じる者はいないからである。この国全てを与えられたとしても我々は幸福ではなく、この国を恋しく思うことはないであろう。他方、コサックの土地（ウクライナ）では我々は気楽である、なぜならこの国の人々は同郷人に接するのと同様に愛想が良く、親切だからである。

3 オレスト・レビツキー（Орест Иванович Левицкий）著の面白い「17世紀後半の小ロシア民衆生活ルポ」、『キエフの故事（Киевская старина）』1901年刊を参照のこと、そこで著者は17世紀末ポルタワの裁判慣例を叙述している。

4 有名なフィリップ・オルリク（訳注 フィリップ Степанович Орлик, 1672-1742, マゼッパ死後の亡命ウクライナ政府のコサック首領）自身が白状していることであるが、ウクライナコサック首領マゼッパの陰謀を初めて知り、その意外さに驚いた彼は陰謀をすぐさまモスクワ政府に暴露すべきかとまず考えた、しかし、最初のむち打ちを被るのは密告者になるといったモスクワ流儀の《無慈悲》に恐れをなした、と述べている。

トルベツコイ公爵には、全く外部の観察者にさえモスクワ文化とウクライナ文化の明確な相違が目についたこと、その差異は標準語・音楽・絵画の範囲をはるかに超えていたことを確認するために、パブロ・アレップスキーの記録再読をお薦めする、彼は疑いもなくモスクワ崇拝者であり、ロシア皇帝と総主教に可愛がられた人物である。

私はあえて主張する、このウクライナ文化はピョートルによって大ロシアの地に移植されたものではなかった。ピョートルはウクライナ文化の若干の、いわば形式面のみを借用した、それはあたかも西洋から摂取したのがヨーロッパ文明の精神内容ではなく、表面的で実用的な成果であったのと同様である。

陸軍幼年学校を彼は貴族に与えた
 小銃に銃剣を装備させ、新たな監獄を多く建設した
 宮廷の祝宴ではフランス音楽を導入した
 夜会には娘や妻を寄せ集めた
 全ての国境に見張り兵を配置した
 国内の港湾を鎖で閉鎖した
 酒独占販売制度、廷臣組織、
 元老院、スパイ、パスポート制度、官位制度を導入した
 農奴の顔を洗い、髭を剃り、軍服を着せ
 彼に銃を装備して、軍事訓練で仕込んだ
 そこでヨーロッパは驚いてアッと叫んだ
 ピョートル皇帝はロシアを文明化した⁵

ミツケービッチのこれらの文句の中には悪意に満ちた怒りがあるようだが、ピョートルによる大ロシア人の生活の「ウクライナ化」は「西洋化」を髣髴とさせる、つまり、またしてもウクライナ人の力が利用された（大ロシアにおける全主教職は、一つの例外以外はウクライナ人によって補充された）、ウクライナの教科書が採用され、文芸習慣のいくらかが借用された、だがただそれだけだ。ウクライナ自身にとってペテルブルグへの文化力の流出はウクライナ文化に対する禁止措置（印刷業圧迫と1720年のウクライナ語によるあらゆる書物の印刷禁止）と共に、もちろん、否定的な結果しか持たなかった。ウクライナは次第に政治的権限が縮小され、組織的計画的に体力が衰退した（北部での運河

⁵ ミツケービッチ（Адам Бернард Мицкевич, 1798-1855, ポーランド詩人）の詩作品『Дядя（訳注 古くから伝わる死者供養の儀式名称）』第三部の「Смотр войска（部隊閲兵）」章の引用句（ロシア語訳はB.レビック）。

掘削と防備要塞の建設、消耗的なカスピ海遠征、ウクライナ住民にとっては重荷のロシア軍のウクライナ宿営)、通商などを害したことでこの地方の経済的自立性の瓦解が生じた。ロシア政府による18世紀前半の全てのこうした措置により、ウクライナは実際に辺鄙な片田舎になり、ウクライナ文化はウクライナ人の力の支援により北部新首都で発展した新ロシア文化が獲得し始めた成果と競争する能力を失った。

だが、トルベツコイ公爵が考える広い意味で「大ロシアの文化的ウクライナ化」が生じ、「ウクライナ文化の共通ロシア化への変化」が生じたとしても、少なくとも19世紀半ば以前にはウクライナ人インテリによる独自文化創造の喪失はさほど正確に生じてはいない。もちろん、18世紀のウクライナ人が帝国勤務で大臣に相当するほどの高い地位を得ることは可能であったし、ペテルブルグ勤務や文学での立身出世は可能であったが、同時にまたそうした成功者で「祖国小ロシア」と「小ロシア民族」への帰属を忘却する者は稀だった。ところで、その際に維持されたのは明確な自らの特徴意識だけでなく、大ロシア人に対するウクライナ人の文化的優越感であった。このことを非常に明確に裏付けているのがペテルブルグの海軍貴族学校視学官でポルタヴァ出身の貴族グリゴリー・ポレチカの著作『ルス人の歴史』である。

トルベツコイ教授は18世紀末からのウクライナ文学復興と当時の大ロシア人文学における一部民族的潮流の間の類似作品を提示している。我々には、ここでの類似性は非常に隔たっていて単に形式的なものに思える。マイコフの『勇士エリセイ』は、オシポフとコテリニツキーの『エネイダ』は言うまでもなく、そのルーツからすると、市民と民族と風刺のモチーフを持つコトリャレフスキーの『エネイダ』とは着想と気風においてほど遠い。

ロシア文学及びウクライナ文学進展のその後の類似性について、両文学における「市民の苦悩」の潮流を取り上げれば、ロシア文学ではこの潮流はマイコフではなくラジーシチェフから進化した。他方、この潮流の反抗的態度の最も卓越した表現者シェフチェンコを代表とするウクライナ文学は、コトリャレフスキーとグラク・アルテモフスキー（彼の農奴制風刺文学作品『地主と犬』）だけでなく、『奴隷への頌詩（オード）』（1787年）を著したカプニストをその先駆者として見なすことができる。

だが、肝心な点はウクライナ文学の原動力となっていたのは単に社会的モチーフだけではない、つまり、それはロシアの「市民的苦悩」にとっては主として食料を与えた。ウクライナ文学復興そのものがウクライナ民族とウクライナ国家の伝統の持続力の現われの一つであった、つまり、後にロシアがウクライナ分離主義（或いはより大げさな言い方ではマゼッパ主義）と呼ぶようになった伝統の持続力である。ところで、それをウクライナ人は民族と国家の自立志向と思っていた。全てを言語概念に狭めてはいけない。ウクライナ文学とは徐々に標準語に変化していった大衆的なウクライナ語で記されたもの全てだけではない。19世紀前半のロシア語はウクライナ語よりもより顕著にウクライナ分離主義理念を普及する手段であった。ロシア軍の将校として勤務していたA・マトロスは1810年ガラ

ツにあるマゼッパの墓の前で、ウクライナの独立について思案しつつ、自らの夢をロシア語で日記にメモしている。もちろん、1820-80年代のポルタワの地主は互いにロシア語で語り合っていた。彼らについては、回顧録筆者であるロシア人ミハイロフ・ダニレフスキー⁶とドイツ人旅行者コール⁷が、「モスカーリ」への憎しみに燃え、ウクライナの独立を夢見ていた、と記している。全ロシアの作家ゴゴリは、同郷人のマクシーモビッチに打ち明け話の時に、「我々のキエフへ行こう、キエフは彼らの町でなく我々の町だ」、と記している。

こうしたこと全てを私が想起するのは、トルベツコイ公爵がウクライナと大ロシアのみでなくベラルシアにおいても類似した現象として述べているこの「地方分離主義」の起源はウクライナと大ロシア（ベラルシアにも全く同様であるが）にとってそれほど同質のものでは全くないことを示すためである。そこで、文化改革及び大衆基盤の上に上層階が有機的に現れうる新文化建築物の建設問題を、トルベツコイ公爵の考えでは大ロシア人にとっても同じくウクライナ人にもベラルシア人にも等しく立ち現れている問題を全く同一とはいえぬ観点で提起することになる。

だが、トルベツコイ公爵の論文全体で最重要な部分としてのこの問題にアプローチする前に、さらに一つ、非常に重要な事実を指摘しておく必要がある。トルベツコイ公爵はウクライナ文化と大ロシア文化の相互関係に言及する際いつも、本当のところは12世紀後半に互いに政治的関係と密接な文化的交流を開始したのはウクライナ全体ではなくて一部地域（ヘトマンシチナと呼ばれるドニエプル左岸、つまり後のポルタワ県とチェルニゴフ県、そしてスロボダ地区、つまりハリコフ県）とモスクワであったという事実にしかるべき注意を向けていない。ドニエプル右岸全体、つまりキエフ、ヴォリニ、ポドリアは、レーチ・ポスポリータの崩壊まで、つまり1793年までポーランド権力の統治下にあった。ホルム市はポーランド王国と共に1815年にロシアに併合された、ガリツィアは一度もロシア統治下に入ったことはなかった。ウクライナ領の大部分を占めるこれらの全ての土地では、ドニエプル左岸とは全く別の文化的結びつきが支配的であった。そこで支配的だったのはポーランド文化である、この地方がロシア権力の支配下に移行するとともにこの文化は強烈さを増しただけであった、なぜなら、古いレーチ・ポスポリータ分割後に初めてポーランド民族運動がウクライナにもベラルシアにも波及して盛り上がりを見せたからである。ここではトルベツコイ公爵による共通ロシア文化のウクライナ・バリエントとロシア・バリエントの内部浸透と外方浸透についての理論は左岸ウクライナに比較すればあまり当てはまらない。いずれにしても、この理論の視点からは、ポーランド化したウクライナの小貴族階層の子孫、60年代におけるアントノビッチ、ポズナンスキー、リーリスキー、ミハリチュク及びその後の追随者のウクライナ民族自意識復興現象は説明不可能である。ボルシェフスキー、チェ

6 ミハイロフ・ダニレフスキーの回想録、1824年『ヨーロッパ報知』1900年第10巻、p 212

7 コール「ロシアの奥地旅行：ウクライナ」、ドレスデン、ライブツィヒ、1881年、p 298-299

チョト、ドゥニン・マルツインケビッチ等で代表される全く同様のベラルシア民族意識復興はトルベツコイ公爵の考える図式にはおさまらない。我々の著者の思想のその後の展開を追跡しつつ、これらの全てを考慮にいれる必要がある。

さて、以前のウクライナ文化が共通ロシア文化に変形し、ウクライナとベラルシアで共通ロシア文化としてその後発展したという自らの理論に依拠しつつ、トルベツコイ公爵は次のような問題を提起している。この文化は然るべき改革のあとで共通ロシア文化として維持されるべきか、あるいは共通ロシア文化はまったく存在すべきでなく、新しく改革された文化をロシア系諸民族それぞれのために創造すべきだろうか？

自らが提起した問題に自ら明確に回答するために、トルベツコイ公爵は各文化には二つの側面があると指摘する。一つは、個別具体的な人民基盤を指向する側面であり、もう一つは精神的知的活動の頂点を指向する側面である、あるいは彼の生き生きとした表現では、文化の二つの階層、「上層階と下層階」⁸が存在するはずだ、と指摘する。

「下層階」はロシア民族タイプの具体的特徴に適応すべきであり、従って、そこではウクライナ語にもウクライナ文学にも席が割り当てられる、なぜなら、具体的特徴はより基本的な文化概念の摂取を助け、人類共通の科学と文化の頂点に直接向かう文化の上層階への移行を容易にするからである。換言すれば、トルベツコイ公爵はすでに何度もウクライナ人の念頭に浮かんだ処方箋「自宅用の文学」を繰り返す、ウクライナ語による平易な科学が作られれば良い、優美なウクライナ文学、特に詩作品も発展させれば良い、だが主に大衆生活を主題とするものに限る。ところで、大衆の経験よりも上のレベルにある物事全て、そして知識人の高度な欲求を満たすべき全てのものは、共通ロシア語を利用すべきである、と言う。家庭習慣のためのこの文学理論がウクライナ民族復活の巨匠の一人であるコストマーロフによってさえ提起されたのは1880-1881年のこと、つまりロシア政府によるウクライナ語への最大の迫害時期（1876年5月18日の政令は民謡の文句に至るまでウクライナ文学を禁止）でありウクライナ民族知識人の最大の精神的衰退時期であった。だが、コストマーロフの提言は異口同音に拒否されたことに言及しておく必要がある。コストマーロフは、ウクライナ語での創作活動を大衆歌と短編に留めるよう提案した。これに対して、ウクライナ人作家達はシェークスピア、バイロン、ゲーテ及び古典作家のウクライナ語翻訳を行い、もちろんロシア検閲が及ばないオーストリアとスイスでウクライナ語による学術散文と学術論文を出した。中傷と嘲笑を含むロシア政府からの迫害もロシア人作家と評論家による説得（主に、雑誌「モスクワ通報」「新時代」「キエフ人」陣営による）もウクライナ人が全く独自の文学を創造し独自の民族文化を発展させるのを阻止できなかった。1905年

⁸ トルベツコイ公爵は、「上層文化」「下層文化」両者ともに単に二つの異なる文化機能を意味していると見なし、この表現の中にかなる評価の意味も込めてはいない、とあらかじめ説明している。

革命はこうしたウクライナ側の努力にとっての最初の風穴となった。ロシアでウクライナ語出版物、大規模書籍出版業、文化啓蒙団体、学術団体が出現するためには、政治的自由の最初のそよ風があれば十分であった。1905年革命の初期においてすでにウクライナ語彙使用を圧迫していたあらゆる制限廃止を支持する断固たる意見がペテルブルグ科学アカデミー、キエフ大学、ハリコフ大学で現れた。それだけでなく、キエフで出された出版物の中にはウクライナ語で書かれた著作の執筆者としてロシア人学者のアカデミー会員シャフマトフ、コルシ、ペレットツ、イリインスキー教授がいることを我々は知っている、ウクライナ人学者のスムツォフ教授、パブルツキー、ダニレビッチやその他多くの学者がいたことは言うまでもない。

1918年にウクライナ国家が生まれた時、ウクライナ科学アカデミーの創立者となったのはペテルブルグ科学アカデミー会員ベルナドスキー（訳注 **Владимир Иванович Вернадский**, 1863-1946、帝政ロシア・ソ連の鉱物学者、地球化学者、ウクライナにルーツがある。著名な歴史家 **Г.Вернадский** は子息）であった、また初期のアカデミー会員には、ウクライナ国立大学教授と並んで、トウガン・バラノフスキー、バガリイ、ペトロフ、カシェンコ、ティモシェンコ、タラノフスキー、コシンスキー、ゼニコフスキー他多くの教授と学者がいたことを我々は知っている。彼らをウクライナ学術機関に導き入れたのは恐怖や暴力ではなかった。なぜなら、ヘトマン政府はロシア文化に対していかなる暴力も使わなかったからである（ウクライナ民族主義者は、逆に、政府のロシア覇権を非難してヘトマンに対する暴動さえ起こした）。彼らは全て上層階文化としてウクライナ文化を自主的に選択した。

現時点でウクライナ知識人社会の側から共通ロシア文化あるいはウクライナ文化に有利な選択問題を提起することは（トルベツコイ公爵が行っているように）全くアカデミックな問題の提起であることを確認するには、ソビエト体制下におけるウクライナ科学の進展、ウクライナ科学アカデミーのみ限定した出版物とその会員と研究員を一瞥するだけでも十分であろう。事実上、否定的な意味でそれを解決するためには、歴史を数十年抹消し、1876年5月18日の政令に戻る必要がある。

ウクライナ住民はすでにウクライナ文化を選択した、そしてこの文化は、見ての通り、その「下層階」を具体的民族基盤に順応させ得ている。トルベツコイ公爵は、この文化の「上層階」はハイレベルのウクライナ知識人の高度な欲求に合致しない、そこで、文化創造観点からすれば最も貴重なこの知識人の圧倒的大部分が自立的ウクライナ文化選択を望まない、との危惧を表明する。仮にそうだとすると、現代知識人の大部分が心の中では（なぜなら、事実上ソ連政権はウクライナ化政策を遂行しつつ、この知識人にウクライナ語で話し書き教授し印刷することを強制しているからである）ウクライナ文化に共感しないで以前の共通ロシアの理想を信じさせておけば良い。彼らは以前の考え方、見方で養育されてきたので自らを変えることは難しい。しかし、彼らに代って、ウクライナの下層社会出身者の通う学校から大学まで卒業した新たな知識人が生まれるであろう、こうした新しいウクライナ知識人は自らをウクライナ文化に帰属する人間でないなどと考えたり想像したりすることはないで

あろう。1—2世代後には、この新たなウクライナ知識人は共通ロシア的な意味の以前の知識人の位置に当然取って代わることになり、問題は自然に解決されることになる。

トルベツコイ公爵は、ウクライナ文化が勝利した場合には、ウクライナの文化レベル全体が低下する、と危惧している。第一に、彼は自立的ウクライナ文化建築の満足しうる上層階建築の可能性を信じていない。ウクライナ文化は共通ロシア文化におけるような豊かな伝統を持つことはない、と見なしている。このことに対しては、ウクライナ文化が建設されているのは無人の土地ではないことを指摘することができる。この文化はウラジーミルとヤロスラフの時代にまで溯る、この文化はトルベツコイ公爵自身の認定によれば、17世紀にモスクワによって摂取され、共通ロシア文化の役割を持って発展し続けた。ウクライナ人は、19世紀の100年の期間だけでもこの共通ロシア文化に彼らがどれだけ広範囲な貢献をし、共通ロシア文化の伝統作りをどれだけ促進してきたか、を見事に認識している、そして自分たちの寄与を拒否しようとは思っていない。ベランスキー、レセビッチ、オストログラツキー、コストマーロフ、ポチェブニャ、アントノビッチ、キスチャコフスキー、コバレフスキー、ウシンスキー、トウガン・バラノフスキー、オフシャニコ・クリコフスキー、これら全てのウクライナ人は彼らがロシア語で自らの業績を著している⁹ことを根拠にしてのみ、トルベツコイ公爵がロシア人学者（ウクライナ文化に対立するかのごとく）の中に含めることが可能であるが、それはウクライナ天才、ウクライナ精神の創造の所産であり、彼ら自身がウクライナ民族性を拒否しなかったのと同じく、我々も彼らを拒否しようとは思わない。現在のところより大きな自由でもって発展しているウクライナ文化（新たに作られているのでは全くない）は、彼らの中に十分しっかりした伝統があるのを見出している。

第二に、トルベツコイ公爵によると、「ウクライナ文化を選択することが可能なのはある明確な偏見を持っている人物のみ、あるいは選択の自由が制限されているものである」、とされている。自主的にウクライナ文化を受け入れている人々の中では、共通ロシア文化との競争から身を守ろうと願う無能あるいは平凡な文化創造者、そして「高度文化の純粋な評価の段階まで成熟していないため当該の地方文化枠内に組み込まれている程度においてしか様々な文化創造所産を評価することのできない、視野の狭い狂信的な地方の排外主義者のみがウクライナ文化を支持している」、と述べている。トルベツコイ公爵のこの危惧は、彼にそうした危惧不信を覚えさせるものとしてのウクライナ文化の本質に関する所見表明を我々に強いる。実際に、先に触れたウクライナ文化創造者の名前は、無能で狭い地方的排外主義者として非難することの困難な人物であることを容易に指摘できる、しかし新ウクライナ文化の本質に関する問題は極めて興味深くそれ自身重要であるので、とくに論じるに値する。

最初に、わが尊敬すべき著者は「新創造の特殊」ウクライナ文化は「以前の共通ロシア文化と何の

⁹ コストマーロフ、ポチェブニャ、アントノビッチ及びキスチャコフスキーは同じくウクライナ語でも著述を行っている、他方、レセビッチとトウガン・バラノフスキーはウクライナ語で著述を行っている。

共通性も持たない」かのように述べているが、なぜこのような確信を持つのであろうか？またしても、彼は自らの論文の初めに述べている通り、文化の名のもとに言語・文学・芸術分野のみをもつばら想定しているのか？もしそうなら、彼は自ら矛盾に陥っていないだろうか。なぜなら、仮に従来の共通ロシア文化が旧ウクライナ文化からの流出物であり、同時に最近までのウクライナ文化でもあるならば（トルベツコイ公爵はウクライナ・バリエントを含む共通ロシア文化の下層階の存在法則を認めている）、いかにして新たな改革ウクライナ文化（あらゆる改革は、トルベツコイ公爵によれば、ウクライナ語への改作、翻訳に帰着するとされる）が共通ロシア文化と何らの共通性を持ちえないのか？たとえ、ウクライナ人がわざと文化面でロシア的なものすべてとたもとを分かつといった異常な目的を立てたとしても、それを達成するのは全く不可能であろう。なぜなら、起源、宗教、何世紀もの同居生活の共通性のきずなが今も今後も常に威力を発揮することになる。だが、その他に、そうした交流の断絶（たもとを分かつこと）は、ウクライナ人勢力の関与によって蓄積されウクライナの歴史・人文学・民族学に関わる文化的価値の蓄積全てを放棄するのも同然となるだろう。なぜなら、マクシモビッチ、コストマーロフ、ポチュブニャ、アントノビッチ及びその他のおびただしい数のウクライナ研究者がロシア語で記述したもの全てをウクライナ語に翻訳はしないであろう。

だが、こうした外面的で、いわば、実務的な考えとは別に、内面的考えと動因がより大きく作用している。ウクライナ文化が創造され発展してきたのは決してロシア文化への敵意や反抗からではない。ウクライナ文化は独自の明確な課題を追い求めてきた。民族的なものを用いて全人類的なものへの移行を追求した。ロシア文化の中にあるより良いものをウクライナ人はまず借用し身に付けた、それは強制力のみによってではなかった。強制によらずにウクライナ人はロシア検閲局に対してプーシキン、レールモントフ、ネクラソフのウクライナ語訳出版権を主張し通した。1899年のプーシキン生誕100周年記念に、ロシア検閲局が多くのウクライナ作家の編集によるプーシキン作品のウクライナ語訳選集の出版を許可しなかったのは、ウクライナ人の罪ではない。ツルゲーネフ、トルストイ、ゴンチャロフ、コロレンコ、マチテト、ゴーリキー、ガルシンその他の数多くの長編小説のウクライナ語訳が外国でしか現れなかったことは、ウクライナ人の罪ではない。ガリツイアでドラゴマノフほどロシア語とロシア文学の普及促進に大いに貢献した者はいない。そのドラゴマノフは、個別のウクライナ人作家がロシア政府とロシア体制に対する怒りをロシア社会、ロシア文学とロシア文化に転化しようとする試みに対して常に最も果敢に立ち向かった。二つの言語、二つの文学、二つの近い文化の平和な共存についてのドラゴマノフの理念は、（両者にとって発展の自由が等しいことを条件として）この問題に対するウクライナ知識人社会層全体の考え方の基礎となった、ことは言うまでもない。

そしていよいよ独立ウクライナ国家におけるウクライナ文化発展の完全な自由が訪れ、ウクライナ語が国家言語となり、ウクライナ文化の前に広い地平線が開けた時、ウクライナ政権はロシア語、ロシア文化に対して迫害も抑圧もまったくしなかった。教授言語としてロシア語を使用する旧大学を閉

鎖しなかったし、ロシア語中等学校をウクライナ語学校に改編もしなかった。新たにウクライナ大学とウクライナ中学校を開設したのだった。だが言うまでもなく、ウクライナ国内のロシア語大学と他の高等教育機関ではウクライナ語、ウクライナ文学、ウクライナ法、ウクライナ史の講座が設けられ、中等学校ではこれらの科目には必修制が導入された。

ウクライナ文化がロシア文化とのあらゆる結びつきを断ち、ロシア文化と「何の共通性も」持たぬようにするには、文化面で極めて多くの共通の絆がウクライナ人とロシア人とを結び付けている、ことを繰り返しておく。ロシア文化と平行してそれに近く親族関係にあるウクライナ文化が発展することはロシア文化に何らかの害を与えることは少ない、それは、例えば、スペイン文化にとってポルトガル文化がすぐそばに存在していることがあまり害にならず、スウェーデン文化にとってノルウェー文化の存在が害にならぬと同様である。学問、文学、芸術の分野で世界的地位をすでに獲得しているロシア文化はそのような懸念を抱く理由はない。ロシア語とロシア文学研究は、独自民族文化を自由に発展させている自由主義ウクライナにおいては完全に自然な現象となるであろう。ロシアの文化的影響に対してウクライナが壁を築くことはないであろう—それはウクライナの自由抑圧、ウクライナの所産と活力搾取、ウクライナ人に似つかわしくない政治的・社会経済的慣習の強制的押し付けに対してこれまで壁を築いてきた、そして壁を作ろうと努力しているのと同じ立場である。もちろん、ロシア文化もウクライナを拒むことはせず、ウクライナ人が創造した文化財で地方的価値を超えたもの全てを自ら摂取するようになる、と予想することができる。

トルベツコイ公爵は自らの論文のある個所で、ウクライナ人にロシア文化から分かれた固有文化を発展させる目論みを抱かぬよう忠告しつつ、いわゆる上層階文化を首尾よく発展させる上で大きな役割を持っているのは当該文化の担い手である民族人口規模である、との考え方を示している。当該文化の担い手の人口が大きいほど、その文化の担い手の中における才能ある人々が生まれる絶対数は多くなる、だがこの論拠は我々を当惑させるものである。なぜなら、知られている限りでは、ある民族の数の多さは才能ある人々の数の多さを条件付けるものではなく、逆もまた同様である。具体的な例を示す必要はないと思う。ただ指摘しておきたいのは、このケースで問題にされているのは人口規模の少ない民族についてではなく、二つの民族について、そのうちの 하나가7500万人で、他方が3500万人¹⁰であることを問題にしているのである。では、デンマーク人、スウェーデン人、ノルウェー人、オランダ人、ポルトガル人、チェコ人、クロアチア人、スロベニア人及び他の小規模文化的民族については何とすべきであろうか？

むしろ、ウクライナ自身とその文化的発展に役立つようにすること、「狭量で狂信的な地方の排外主義者」がウクライナ社会の有力者にならぬようにすること、は当然である。そうした有力者は国家リー

10 D.I.ドロシエンコの論文は1928年に書かれたものである（編者注）。

ダーとしてウクライナ文化に自分の刻印—「貧弱な地方的虚栄、月並みさ、因習尊重、反開化主義、絶えぬ猜疑心、競争に対する絶えぬ恐怖の刻印」—を押す可能性があることについて、私は尊敬すべき著者と全く同じ考えである。こうした人々は実際に「ウクライナ住民全員がロシア全体に激しい憎悪を抱き、学校・出版物・文学・芸術などあらゆる手段でこの憎悪を保つよう」仕向ける可能性がある—全てはトルベツコイ公爵が叙述するようあまり魅力のない前途である。あるウクライナ人グループのこの種の「文化プログラム」を遂行する危険な状況が存在し、残念ながら今でもそうした欲求を持った人々がいることを認めざるを得ない。だが、彼らにこれまで断固反対し、今も反対しているのはより健全な見解を表明している他グループ、他の人々である。彼らは、ウクライナ文化は2級品ではあるはずはない、それゆえ地方的閉鎖性と狭量な地方ナショナリズムを活力源とするものではない、と確信している。千年の文化を持つ土地に住み、自らすでに千年間文化的生活を営み、アジア草原との数百年もの闘争において文明世界に偉大な貢献を果たし、ラテン・ポーランドの襲撃にもモスクワ・ロシアの中央集権制に対しても自らの個性を維持してきたウクライナ人は将来においても、その文化があるものからかけ離れたものになりさえすれば良いといった動機付けではなく、組織的で不足なく広く発展するためのあらゆる条件を備えている。そして客観的に言って、ソビエト社会主義体制の困難な条件下で、西ウクライナ領内でのポーランド権力と圧制と悪意の中で、そして移民社会において創造されてきたウクライナ文化財を注視すれば、我々はどこにも閉鎖性と自足への欲求を見出すことはない、どこにもロシア文学と学問への敵意を見てとることはない、逆に、全ての好ましいものと実際に文化的に価値のあるものがロシア文化の中からウクライナ人によって摂取されている、特に自発的に、なぜならこの文化は彼らにとって他のどれよりも分かりやすくて親密なものだからだ。ガリツィアのウクライナ人についてさえ同じことを言うことができる、彼らにとってロシア文化はいつも縁遠く、外部のものであったが（一定の歴史的条件のためである）、トルベツコイ公爵は彼らの「民族自意識の異常さ（奇形）」をまったく根拠なく非難している。もしも、彼がより近くより公平にガリツィアとの間柄を見極めていれば、ガリツィア・ウクライナ人の民族自意識（ザカルパチア及びブコビナのウクライナ人も同じく）を「奇形にした」のは彼らの中にモスクワ蠱虜を植えつけたことによる、ということを知るはずである。それが彼らを退廃させ、同時にポーランド語模倣への内的抵抗力を弱めた。現在もポーランド人はガリツィアで大部分住民のウクライナ民族主義気分に対してモスクワ蠱虜家（あるいは古ルシン人）を支援していることは周知の事実である。見込みは正しい、このことによってウクライナ人の民族的抵抗力は弱まり、他方でモスクワ蠱虜少数派はポーランド化するには最も御しやすいグループとなっている。だが、どうやら、トルベツコイ公爵自身はウクライナにおける将来の文化的創造は彼にとって望ましい方針でなされること、つまり、多層階建築物が現れることをあまり確信していないらしい。トルベツコイ公爵は、上層階と下層階の他に、さらに中間的な階を想定している、その中間層では「下層階」が共通ロシア文化のウクライナ個別化を成し、「中間諸階層」が、明

らかに、過渡的なものを成し、「上層諸階」は共通ロシア文化支配のために独占的に割り当てられている。論文の最後で、長い間禁止されていた新機軸としてのウクライナ化への軽率な熱中について親ウクライナ派に非難を浴びせながらも、「大ロシア文化に合致しない特別なウクライナ文化創造の正当性そのものはもはや拒否すべきでない」とトルベツコイ公爵は認めている。ウクライナ人の民族自意識の正しい発展によってその文化に自然な境界、本質、課題「共通ロシア文化のウクライナ個性化になること」が指し示されることを、彼は単に望んでいるのである。

トルベツコイ公爵が民族自意識の「正しい」発展という言う時、それは一体何を意味しているのか、なぜそうした発展が文化創造における自制に結びつくのか（「異常な」発展をすれば自立的ウクライナ文化創造にとっていかなる障害にならないと、解釈できる）、解釈するのは難しい。将来、その関係はどうなるのかを予測するのはさらに難しい。どうなるかはそのうち分かるであろう。だが、今のところウクライナ人は、人民の精神生活の様々な欲求を満足させると同時に人民大衆の啓蒙及び知識人階層の高度な欲求をも満足させようようなウクライナ民族文化の一階建て建物の上に多層階の様々な種類の文化財建設の方を望んでいる。合法化された文化的疎外から将来計画を作成するには、ウクライナ人は上層社会と下層社会の文化的断絶のせいであまりに大きく、あまりに長く苦しんできた。一時的にでも上層社会が低下して、代りに、中層社会レベルが上層すればいいのだが。それはすぐに前のよりもさらに高く成長する新たな芽を生むだろう。

N.S.トルベツコイ著『D.I.ドロシェンコ氏への返答』

『ヨーロッパ通報』第5巻に掲載された私の論文「ウクライナ文化問題について」は、予想通りウクライナ出版物でかなり激しい論争を呼び起こした。論争は、難癖の多い不当な感情的なものであったのは当然であった、なぜなら論争が本職のジャーナリスト達によって行われたからである。この新聞紙上の騒然とした論争とは異なって、D.I.ドロシェンコ教授の論文は概して冷静な学術的調子で終始一貫しており、むしろ、好意的な批判内容であった。それにもかかわらず、ドロシェンコ氏の批判は私の論文に対するウクライナ人の全ての反応に特有のある欠陥を免れていない。そうした欠陥の一つは、ドロシェンコ氏は私の論文を他の（特に私が執筆した）ユーラシア主義論文の文脈全体から抜き出して自然な文脈を考慮せず吟味している点である。このことが多くの誤解を生んでいる。ドロシェンコ氏の論文の最後の文句の一つはそうした誤解である。彼はそこで、私がウクライナ人インテリとウクライナ人大衆との間に何らかの隔壁を築く望みを抱いているとして責めている。ユーラシア主義を多少なりとも知っている者は誰でも、インテリと大衆の間の及び断絶排除がユーラシア主義運動全ての主要スローガンの一つであることを知らぬはずはない。なぜなら、仮にユーラシア主義者がピョートル一世によって実施されたロシア文化破壊に対して否定的態度を取り、そしてロシアインテリ旧世代を盲目的ヨーロッパ崇拜のせいでは非難しているとすれば、その理由は主として、西欧化がロシア文化の「上層階」と「下層階」との間に深い溝を作り出し、インテリを大衆から無理に引き離し、そのようにして、ロシア民族全体の以前の文化的統一を壊したことにある。もしも、ドロシェンコ氏がこのユーラシア主義の文脈全体を考慮に入れていれば、おそらく、私が論文で文化の諸階層について述べていること全てをより正しく理解していたであろう。ユーラシア主義教義の文脈全体の軽視を生んでいるのは尊敬すべきドロシェンコ氏の思想プロセスがある種典型的な西欧主義者のものだからである、それは西欧主義者との対論であれば適切であり、急所を突いたものとなったであろう。だが、西欧主義の基本的前提を疑っているユーラシア主義者との対論では見事な外れとなっている。例えば、ドロシェンコ氏は、ウクライナ人は「アジアステップとの数百年の闘争において文明世界に大いなる貢献を果たしてきた民族だ」と述べている。ここでは、「文明世界」とは、明らかに、ロマンス・ゲルマン世界と理解される。我々ユーラシア主義者には、「アジアステップ」は同じく「文明世界」である、確かに、ロマンス・ゲルマン世界とは全く異なる文明を持った世界であるが、「文明世界」へのウクライナ人の主要な歴史的貢献として、ユーラシア草原の農耕適地支配よりも（なぜなら、結局のところそれはウクライナ人のみでなく全てのロシア種族の協力によって支配が確立されたので）、西洋ラテン世界の急襲に対してロシア正教を勇敢に守った点にある、と我々ユーラシア主義者は見ている。それゆえ、15-17世紀のウクライナ文化も我々には貴重であるが、それは決してそのヨーロッパ的特質によってではなく（なぜなら、率直に言えば、このヨーロッパ的特質は極めて比較的なものであり、極

めて地方的で最良のものではない)、またウクライナ文化の中に摂取されたヒューマンイズムの要素と宗教改革、あるいはカトリックのスコラ哲学によるものでもまったくない。ウクライナ文化は、こうした全てのやむを得ない歴史的に不可避な西欧への譲歩にもかかわらず、ロシア正教への忠誠を維持し、敵の道具を利用して正教を防御の鎧に包んで守ったことで貴重である¹¹。

完全に公平な視点に立ち、民族的自尊心と結びついた偏見から距離を置き、最大限の好意をお互いに発揮するよう努めることで、過去および現在の大ロシア・ウクライナ文化交流について、さらに現在抱えている問題だけでなく過去の評価についても生産的に語るができる。私は自分の論文の中でまさにこうしたことを達成しようと努めたのであった。私はピョートル以前のモスクワ文化を愛し高く評価しており、当時のポーランド・西ロシア文化よりもモスクワ文化を好んでいるので、自己のこの個人的愛着を抑制し、あらゆる判断評価を控えて事実確認のみに努めた。残念ながら、西欧主義者には習性になっている判断評価を断念するのははるかに困難である、おそらく、そうした評価はロシアの欧化時期に、広く受け入れられ誰にでも知られる紋切型表現となり得ていたのであろう。このことはドロシェンコ教授のピョートル以前の二つのロシア文化のバリエントに関する見解の中にも反映している。確かに、我々の尊敬すべき討論者は芸術分野におけるモスクワ・ルーシのいくつかの業績を否定していないが、ただそれだけだ。他の箇所では、彼はモスクワ・ルーシについて、鞭打ち拷問の優勢、裁判遅滞、全体的無法における全員の平等、文字と儀式への狂信など、月並みな西欧主義者の見解を述べている。逆に、当時のウクライナの方がドロシェンコ教授にはある種地上の天国、自由と啓蒙の王国と考えられている。問題へのこうしたアプローチはあまりに皮相的であり実りがないように我々には思える、なぜなら解決があらかじめ定められているからだ。ロシア文化の二つのバリエント（西文化と東文化）の間には引力もそして反発も引き起こしたかなり深い差異が存在したことは、疑う余地がない。ウクライナ人にとって絶対主義国家体制は何か異質で縁の遠いものであった、なぜなら、それは彼らにとってはポーランド国家と結びついており、この国に対して自ら防衛せざるを得なかったからである。ウクライナ人は、国家抑圧からいつも逃れることで発展してきたので、当然アナキーにきわめて近く、一定の国家極小主義の傾向があった。逆に、大ロシア人は国家建設プロセスにおいて、また国家統合の巨大な可能性意識と使命意識を抱きながら成長し発展してきたので、絶対主義国家体制は彼らにとって独自の民族事業、民族的使命であった。そこで、彼らにとって一定の国家至上主義、やむを得ず国家権力の無慈悲さと結びついた国家全体主義は自然なものであった。国家体制に対する態度のロシア文化の二つのバリエントのこの著しい相違がある反発を引き起こした。モスクワっ子にはウクライナ人がアナキストのように思われ、ウクライナ人にはモスクワっ子が陰気で残酷に思えたであろう。だが、この相違は同時にまた引力も生みだした。モスクワの国家全体主義

11 それゆえ我々は正教に踏みとどまらなかった一部ウクライナ人を文化的、精神的に歪められた、と考える。

と強国情念は、過酷な国家権力を伴うものではあるが、強烈な印象を引き起こし、感染作用をなし、そして、もちろん、このことがウクライナ国家要員をモスクワ合流に駆り立てた。しかもモスクワ合流のみでなく、統一ロシア国家の建設に（恐怖のためではなく自主的に）最も積極的に参加するよう駆り立てた。こうした引力と反発は他の文化分野でも見られた。モスクワがその国家体制パトスによってウクライナ人を押しつけ同時に引き付けたとすれば、ウクライナは全く同じくモスクワっ子を表面的に洗練された西欧様式の教養パトスで押しつけ同時に引き付けた。そこには引力も反発もあったことは疑いない、だがその引力も、その反発も一定の根拠を持っていたことも同じく疑いない。ドロシェンコ教授はモスクワの国家全体主義パトス全てを管刑（圧制）支配といった、つまりモスクワからの反発力のみ考慮に入れ引力は考慮しない西欧主義者の決まり文句で単純化して説明しようとする傾向がある。そのようにすれば17世紀のウクライナの教養パトスでもって行動することも可能であろう、つまり、押し退け得た、そして事実モスクワっ子を押し退けたウクライナ文化の外的特徴にのみ留意することも可能かもしれない。と言うのも、実際に、ウクライナの学校数について言及する際には、ウクライナ神学校が理想からは程遠いことを忘れてはいけぬ、ウクライナの啓蒙について言及する際には、それが極めて一方的なスコラ哲学的性質を持ち、実生活からは程遠く、表面が内面よりも圧倒的であり、その啓蒙システムでは立派な外観と知的訓練があまりにしばしば道德教育と一致していなかった、17世紀ウクライナ学者のモスクワ在住敵対者がそのことを特にしばしば指摘していたことを覚えておく必要がある。万事はその通りである。もしも、古いモスクワ文化を拷問、管刑、無教育で単純に説明するのなら、ウクライナ文化をうめぼれの強い神学校的教条主義とコサック本營のアンキズムで簡単に説明することが可能である。だが、こうしたアプローチ方法は有益だろうか？風刺詩と牧歌詩との執筆を詩人に任せ、風刺論文と讃辞との編集を社会評論家に任せるとすれば、客観的な歴史家はまず第一に最大限の共感と内存を目指すべきである、つまり、研究対象たる歴史的個性（人間個人あるいは人間グループ、つまり、個々人、社会階級、民族、文化対象など）の見地に立つよう原則として努めるべきである。二つの歴史的個性とその相互関係が話題になっている時には、公平な歴史家は双方の文化に感情移入すべきである。当該ケースでは17世紀ロシア文化の二つのバリエントの相互関係に関する問題において、押し退けも引力も存在したが、引力の方が強かったのかを確認しなければならない。そして引力が強かったのは、全ロシア統一と民族的課題の共通性の意識が存在したためであった。モスクワっ子にも、また同じくウクライナ人にも民族問題は第一に宗教的なものであり、基本的民族課題となっていたのはロシア正教の純粋性維持と思われていた。ウクライナ人（正確には、ウクライナの指導的社会層）は、自らの正教とロシア性維持のため、そしてポーランドの圧政に対して自らを守るためには、（モスクワに強く備わっているような）強固な国家体制が彼らには不足している、と考えた。他方、モスクワの指導的社会層は、正教の純粋性維持のためには、ウクライナが誇る教養¹²がモスクワっ子には不足している、と考えた。このように、ロシア種族の双方、ロシ

ア文化の両バリエントは、ある全ロシア的課題遂行のために反発力を克服して、互いを頼りとし、相互に補い合うべきであった。

こうした全ロシア的課題の存在意識、つまり全ロシア的統一の意識は歴史的に重要な事実である。この意識と同時にロシア両種族の特色と特性の意識も存在したことは疑うべくもない。だが、まさに両種族の統合（つまり全体の統合意識と各部分の特色意識）は一つの民族的個性の二つの個別化、ロシア文化の二つのバリエントについて語ることを可能にする。ドロシェンコ教授は、あたかも私が二つのバリエント文化の相違の深さを軽く見て、言語と文学上の差異に単純化している、と理由もなく見なしている。私の論文はそうした断言をなすための根拠を提供していない¹³、仮に私が文学の問題に若干詳しく立ち入っているとすれば、それはただ、言語・文学研究者としてこの文化分野こそが私には親しく知っているからである。同じく、あたかも私がロシア文化の二つのバリエントの相違出現が15世紀だと見なしている、とするのは間違っている。差異が発生したのは、無論、はるかに早期であり、12世紀後半にはすでに明らかになっていた。だがこの差異が顕著になったのは、一方では、西ロシアでポーランドの影響力が強まった時期からであり、他方では、全東ロシアがモスクワ権力の支配下で最終的に統一してからのことである、まさにこの意味で私が述べた以下の文を理解すべきである。「15、16世紀及び17世紀前半の間、西ロシア文化とモスクワ・ルーシ文化は異なった道歩んで発展したので、17世紀半ばにはこれら二つの文化の差異は著しく深まった」。

ドロシェンコ教授は、「17-18世紀の境目に大ロシア精神文化のウクライナ化が起きた」という私の見解に同意していない。ドロシェンコ教授は、そのようなウクライナ化は言及するには当たらない、との考えである。なぜなら、ウクライナ文化精神もウクライナ政治行政体制も摂取されなかったからだ、としている。だが、このことに対しては、精神は借用する異質文化物の中に具体的に表現されるものであり、個別精神要素が借用されて土着精神要素のなかに入って融合し、ある新しい精神を作り出すものだから、異文化借用に際して精神は決して借用されない（私の小著『ヨーロッパと人類』参照）と、真っ先に返答すべきであろう。それ以外はあり得ない、大ロシア精神文化のウクライナ化に際しても、もちろん、そうであった。ウクライナの政治行政体制は、もちろん借用され得なかった。なぜならロシアは、古いモスクワ文化を拒否し、それを時代遅れで不要なものと言明したので、国家体制への基本方針を拒否することはできなかった。さらに、この国家至上主義、ピョートル改革後の国家力への基本方針は国家力を自らの目的に従わせようとする宗教的使命理念によって抑制されていた以前よりもさらに断固たるものとなった。そういう訳で、ウクライナの国家極小主義の摂取はとて

12 この場合に前者と後者がどの程度正しかったか、或は間違っていたかについては触れないことにする、同じくまた政治的思惑、ウクライナ指導者層とモスクワ指導者層が果たした役割についても言及しない。なぜならここで我々に興味があるのは歴史文化的問題面だけだからだ。

13 逆でさえある、その差異は「極めて深い」ものだった、と私の所では率直に述べられている。

も考えられないことであった。もちろん、この状況は少なからぬウクライナ人にとって気に入らなかった、それにこの事態はマゼッパの政策に現れていた分離主義の流れを少なからず促進した。だが、他のウクライナ人は逆に大ロシアの国家至上主義熱に感染して、全ロシア国家建設に積極的に参加した。こういう訳で、私は大ロシア精神文化のウクライナ化についての自らの考えを捨てようとは思わない。ピョートル時代及びピョートル後時代の共通ロシア文化は、ピョートル前ロシア文化のウクライナバリエーションとモスクワバリエーションの妥協の産物であった。そうした妥協の際の常として、それぞれの側が自分の民族的財産の一部、しかも大変貴重な一部を犠牲にした。大ロシア人はウクライナの伝統に合わせて自らの精神文化の多くの伝統を捨てた、ウクライナ人は文化が一部世俗化したために国家至上主義がさらに深まっていたモスクワに合わせて自らの国家極小主義を捨てなければならなかった¹⁴。

歴史問題から現代生活問題に話題を転じると、私は、ドロシェンコ教授が私の論文の基本的考えを全く把握していないことについてまず指摘しなければならない。それはおそらく、私が使用している「文化建築階」の「上層」「下層」イメージといった簡略表現の不明瞭性が原因かもしれない。私は、脚注でそのイメージを解説し、読者に誤解を与えぬよう努めたつもりだが、それでもこうした誤解が生じてしまった。そして、ドロシェンコ教授は（我が論文のウクライナ人批評家の多くと同様に）、私が叙述したイメージについて、ウクライナ文化と大ロシア文化との間にある種のヒエラルヒー関係を確立して、ウクライナ文化を下層社会文化とし大ロシア文化を上層社会文化にすることを私があたかも望んでいるが如く解釈した。ここには、二重の誤解がある。第一に、私が「文化建築階」の「上層」「下層」といった用語を使用した個所では評価或いはヒエラルヒー分類のいかなる意味も含んでいないからである。第二に、私には「共通ロシアの（全ロシアの）」という用語と「大ロシアの」と言う用語とは決して同意義ではないからである。ドロシェンコ教授は、「民族的なものを用いて全人類的なものへ移行すること」をウクライナ文化の（他のあらゆる文化に対する）肯定的課題と見なしている。ここではおそらく、我々は意見が食い違っている。私は、全人類文化の可能性を否定する（我が小著『ヨーロッパと人類』、また『ユーラシア通報』第3号の論文「バベルの塔と言語混乱」参照）。同時に

14 私はここではドロシェンコ教授によるピョートル時代のロシアの西欧化について述べたこと全てを脇に置いておく。その西欧化の結果が良くなかったこと、それは我々、ユーラシア主義者には誰よりも良く知られている。我々はその原因として、第一に、ピョートル一世がロシアに移植した西欧文化そのものが大きな欠点を抱えていた、第二に、西欧化のプロセス自体がいつも至る所でピョートル時代と変わらずに進展し続けて、必然的に精神的道徳的に粗野なものになった、と考えている。西欧化とはあたかも西欧文明の歪んだ鏡のようなものだ。その鏡の中ではこの文明のあらゆる欠点がとくに明白に見える。そしてもちろん、「顔がひん曲がっているのだから鏡に難癖を付けるべきではない」…。という訳で、西欧化の結果が悪かったのなら、他の結果はあるはずがなかった。従って、このことから何らの西欧化も存在しなかったかのように結論づけてはならない。そうではなく、西欧化は存在した、しかもそれは可能な限りの西欧化であった。おそらく、ドロシェンコ教授が17世紀共通ロシア精神文化の相続関係の事実を認めたくないのは、同じように鏡の中を覗き込みたくないことが根拠になっているのであろう。ピョートル一世以前の時代は（モスクワでもウクライナでも）、少しはロマン主義的ヴェールに覆われていた、そしてそれを美化することは可能である（ドロシェンコ氏がそうしたことをウクライナに対して行っているように）、だが18世紀は非ロマン主義時代だ。

また私は、各個人（私的な人間個性）は常に自らの文化的伝統と潜在力を持つ個別民族集団のメンバーであり個別化であること、そしてまた、この民族的個性、民族もまた自らの文化的伝統と潜在力を持つより大規模な多民族的個性（だが人類とは一致しない）のメンバーでもありと考えている（私の小著『ロシア的自己認識の問題について』の序言参照）。文化的創造に際して、才能豊かな創造者は誰もが（個人でも、民族の一部でも、民族全体でも）、可能な限り大きな文化主体のための、つまり当該創造者が帰属する最大規模民族個性のための文化財創造を目指すものである。それは、仮に（不正確で誇張的だが）全人類志向¹⁵と名付けることができる、だがそれは誇張であることを覚えておく必要がある）。仮に「全人類的なものへの志向」表現をまさにこの意味で理解すれば、その志向は小さな閉鎖的文化単位からより広範で自らの中に当該文化及び他の類似文化単位を包含するものへと上昇することに繋がるはずであるのは明らかである。その際、この上昇は段階的なものである、なぜなら、最小文化単位と最大文化単位との間には、あるものが別のものに同心円的に包含される「中間的」単位がさらに多く存在するからである。ウクライナ文化の問題に関して言えば、このことは、ウクライナ文化（全く同様に大ロシア文化）にとって「民族的な道から全人類的な道へ至る」には共通ロシア文化を経由することを意味する。ピョートル一世時代からの共通ロシア文化（全ロシア種族、つまり東スラブ種族の文化的歴史的総体として理解される文化）はヨーロッパ文化に参加するようになり、そしてロシアインテリにとってはすべてのヨーロッパ的なものが全人類的なものであった。本来の意味で全人類的なものになるためには、ウクライナ人、大ロシア人あるいはベラルシア人によって創造されたあらゆる文化的価値は、だから、まずは共通ロシア的なものであるべきだった。例えば、ゴーゴリがヨーロッパ人作家となりえたのは、彼が共通ロシア文化に加わったからである。我々、ユーラシア人は、将来にはロシア文化がヨーロッパ文化の一つでなくなり、独特の共通ユーラシア文化に参加することを予期し期待する（ロシア文化の他にユーラシア諸民族の文化も共通ユーラシア文化の諸個性である）。だが、その時には、ウクライナ文化から共通文化へ至る道はヨーロッパ人でなくユーラシア人の道経由であり、共通ロシア文化を経由して道が通ることになる。要するに、大きな道へ出ることを望むウクライナ人にとって共通ロシア文化は、いずれにせよ、避けて通れない。民族的なものから全人類的なもの（つまり民族を超え、最大限拡大した民族）への移行を実際に希望するウクライナ人は、その第一歩となるのはウクライナ的なものから共通ロシア的なものへの移行であることを覚えておく必要がある。この一歩を恐れる者は、狭量な民族的限界の外に出ることはないであろう。

共通ロシア文化への恐れは多くのウクライナ人にとって、むしろ言葉への恐れである。実際には共通ロシア文化の要求とは何に帰着するであろう。いわゆる東スラブ人の民族諸文化がいかなる他文化

15 例えば、シェークスピアの出現は人類史における重要な出来事であるといった表現は単純な誇張である、なぜなら現実の人類は圧倒的多数の意味では黒人、中国人及び他の様々な文化圏に属する人々から成っており、彼らにとってシェークスピアは昔も今も何ら重要な役割を演じていないからである。

よりもお互いにより近くなることであろう。その親密性は、特に地域事情・地方条件との結びつきが極めて弱い文化価値及び文化分野においては特に強くなるであろう。最後に、前述の特に地域事情・地方条件と全く無関係な文化分野の親密性は、個々の「東スラブ諸種族」文化間に不要な隔壁を設けることで歯止めをかけられないであろう。これら全てのことは全く当然のことであり、東スラブ族の性質そのものから発していることである。

ドロシェンコ教授は、「ロシア文化」（つまり大ロシア文化）とウクライナ文化は互いに他のいかなる文化よりもより近くあるべきであることを否定しないが、これら最大限互いに近い二つの文化を同じ名の下に統一することを恐れている。彼は、現代ウクライナ文化がピョートル時代後の共通ロシア文化の伝統を継承すべきであると認めるのだが、継承すべきものとしてウクライナ出身者によって創造された共通ロシア文化財のみに制限する。彼はこの立場の完全な不利にまるで気付いていないようだ、その条件では大ロシア人はウクライナ人よりも大きな「ハンディキャップ」を得ることになる。なぜなら大ロシア人は18-19世紀の共通ロシア文化の全遺産を決して拒否しないからである、それはこの文化に大ロシア人のみでなくウクライナ人も遺産を残しているからである、大ロシア人はプーシキンとトルストイのみでなくゴーゴリも自分たちの仲間とし、メンデレーエフとシャフマトフのみでなくポチェブニャとコストマーロフも自分たちの仲間と見なすであろう。そのように行動する大ロシア人は全く正当である、なぜなら、第一に、上述のウクライナ人文化創造者はロシア文化の共通文脈から分離不可能で、この文脈に有機的に結びつき帰属しているからである、第二に、彼らは全て独自のウクライナ性を排除せず、同時にまた自らのロシア性も拒否せず、ウクライナ人のためだけでなく全ロシア人のためにも創造活動をおこなったからである。ところで、もしも大ロシア人が正当な根拠を持ってゴーゴリ、ポチェブニャ、コストマーロフその他をよそ者でなく仲間だと認めているとすれば、ウクライナ人も共通ロシア文化創造者としてのプーシキン、トルストイ、ドストエフスキー、メンデレーエフ、シャフマトフその他をよそ者でなく仲間と見なす同様の根拠を持っているはずだ。なぜなら、第一に、ロシア文化の共通文脈、それが無ければ前述の創造者は存在不可能であったところのものであり、それはウクライナ人の積極的な参加によって造られたものであることである、第二に、前述の全ての創造者は大ロシア人だけでなく、ウクライナ人も含めて全てのロシア人の為に文化を創ったのである。ところが、ウクライナ人には19世紀の共通ロシア文化遺産の当該部分を今や受け入れぬようにとの提案がなされている、その部分を継承する根拠は無いと彼らは吹き込まれている。

ロシア文化の共通文脈を拒否するのは、大街道（上述の意味での人類共通の道）への出口を閉ざすに等しい。それは非常な自己規制であり、自己去勢のようなものである。真に偉大な文化創造者がそうした体制に妥協するとすればそれは強制によってのみであり、長くはそれに耐えられぬものだ、と私は他の論文で主張した。ドロシェンコ教授は、逆であるかのようなことを裏付ける一連の名前を挙げている。一方で、それは旧体制でも自らのウクライナ性を拒否しなかったコストマーロフ、ポチェブ

ニヤ、マクシム・コヴァレフスキー、オフシャニコ・クリコフスキー、トウガン・バラノフスキーその他の学者である。他方では、それはドイツによるウクライナ占領時代にウクライナ科学アカデミー設立に参加することで「ウクライナ文化を上層階文化として選択した」ヴェルナドスキー、コシンスキー、タラノフスキー、ゼニコフスキー等である。ところで、この事実は私の主張には少しも矛盾しない、何れのグループの学者も自己のウクライナ性を主張しつつも同時に自らの共通ロシア性を拒否しようとせず共通ロシア文化分野で創造活動を続けたのである。特に、先に挙げた二番目のグループの学者は選択の際の社会状況がまったく尋常ではなかった¹⁶ので一般には言及しない方が良い。

ドロシェンコ教授の主要論拠の一つは事実上すでに解決済みの議論への言及である、国民学校から大学までウクライナ語で学んだウクライナ知識人の新たな青年層は自らをウクライナ文化人以外と見なすはずがない、そして昔のウクライナ知識人からさらに2-3世代後の時代には共通ロシア的意義は跡形もなくなるであろう、と言うものである。これに対する回答として、革命前ロシア政府とウクライナ民族運動との闘争史を思い起こすことができるのみである。1876年政令作成者は、ロシア学校で学びウクライナ語で読む可能性がなくなる2-3世代後の時代には、ウクライナ知識人が自らを共通ロシア文化人以外と見なすことは無くなり自らのウクライナ性を忘れてしまうことも含めて、ウクライナ問題は「自ずと解決するだろう」、とおそらく思っていたであろう。ところが、あの悪名高い政令発布から50年も経過しない間に、ウクライナでもロシア語等の印刷出版を禁ずる反対法令が出現したのである。1876年政令作成者はこうしたことを予測可能だっただろうか？もちろん、可能だった、もしも彼らが賢明で洞察力を持っていればのことではあるが。ウクライナ人がロシア人だけでなくウクライナ人でもあることを忘却させることによって革命前ロシア政府は本性を抑圧した、だがこうした抑圧は成功しなかった、なぜなら「本性をドアの外に追い出しても、それは窓から入り込む」からである。今や逆戻りの失策を行っている現ウクライナ政府は極右ウクライナ民族主義者と協力してウクライナ人はウクライナ人だけでなくロシア人でもあることを忘れさせようと強制している。それは成功不可能な本性への抑圧同然である、早晚本性はその本領を取り戻す。ウクライナ民族自意識は必ずやその中に両要素、共通ロシア的なものと個別ウクライナ的なものを含むはずである。これら要素の一つを（何

16 全ての政治的側面とウクライナ科学アカデミーが設立された事情は脇に置くとして、市民戦争が終了し、ウクライナとロシアソビエト連邦社会主義共和国との間で国境が撤廃された後に、アカデミー会員B.II.ヴェルナドスキーはレニングラードに移住した、そこで彼は（革命前と同様に）共通ロシア（現在は全ソ連）科学アカデミーの積極的メンバーであった、他方、コシンスキー、タラノフスキー、ゼニコフスキー教授は外国へ移住し、移住先ではウクライナ人移民でなくロシア人移民環境の中で暮らした。

17 そうした歪んだ自意識はガリツィヤ知識人に特有である、彼らは歴史的な原因により共通ロシアの結びつきを認めないだけでなく、ロシアを全く知らない、さらに悪いことにはロシアについて歪曲したイメージを持っている（それはおそらく全てのロシア人に対してではなくモスクワ最良の者についてであろう）。そしてドロシェンコ氏が行っているように、ガリツィヤ史の悲劇をモスクワ最良派の罪に帰することは決してできない。いわゆる大ウクライナにおける共通ロシア性意識は今日まで多くの知識人に特有の者であったが、その代わりに非常に多くの者に個別ウクライナ性意識が損なわれていた。

れの要素にしても)人為的に抑圧することは歪み傷つけられた自意識を生むことになる¹⁷。真の文化的創造活動はこうした本性をゆがめたり傷つけたりすることが無くなり、ウクライナ人が自分自身を認識して自分自身になる、つまりウクライナ人だけでなくロシア人でもある、ロシア人だけでなくウクライナ人でもある可能性を獲得する時点からスタートする。その時に共通ロシア人及び個別ウクライナ人としてのウクライナ民族個性の存在が文化においても自分に取って相応しい形を見出すはずである。標準的ウクライナ人の共通ロシア性意識は、私が考える「上層階」文化領域では特に強いので、ウクライナ民族個性の共通ロシア人の顔はまさにこの文化領域面でとりわけ明確に現れるだろう。

ウクライナ人が共通ロシア民族全体に帰属するといった自覚はこの全体を構成する各民族間の無用の隔壁を排除することに反映するはずである、しかもその上、まさに文化上層階ではそうした隔壁が特に少なくなることが当然なのである。だがこのことからはまだウクライナ人は学問、哲学と大文学の為にもつばら共通ロシア語だけを使用すべきだ、ということにはならない。自然な差異としての言語的差異はあらゆる文化層にも沁み込んでいる可能性がある(もっともこのことは全く必然ではない)。だが自然な発展においては言語区別と当該文化領域面の区分の間には一定の対応性が生じるはずである。文化建築の上層階で使用される言語システムは当該民族全体の多様性に応じて下層階で使用される言語システムに較べると区別が少ないはずである。その際、区別は言語の語彙面に主に関係するのであり、文体とシンタクス面では程度が少なくなり、形態変化と音声面ではほとんど関係ない。ところが実は現在では丁度逆のことが生じている。特殊ウクライナ民族色への志向を持つウクライナ文学作品、庶民生活を題材にした物語あるいは庶民的文体の詩作品は大ロシア知識人にとって読んで理解するのが容易であるが、ウクライナ語で書かれた学術書を理解するのは極めて難しい、ブルガリア語や或はポーランド語で書かれているものよりも遥かに難しい。こうしたことは、学術用語及び抽象的「上層文化」概念を意味する単語によって生じている、つまり、全ての人民集団によってではなく比較的限定された知識人上層によって造られている全ての語彙部分がウクライナ語では共通ロシア語から可能な限り分離するよにとの意識的な目的で造られて来たからである。ドロシェンコ教授がなんと云おうとも、ウクライナ学術語、高標準語はこれまで共通ロシア文化からの主要な分離手段であった。ウクライナ民族運動の知的上層部が身につけた学術用語、抽象的及び特殊な高標準的用語の創造・生産方法は、ロシア文化から何としても分離してウクライナ教養人とロシア教養人が交流し互いに知り合うことを可能な限り困難にしようとする意図によるものであり、これを正当化するそれ以外のいかなる合目的理由などあり得ない。分離のための分離でなく、民族エネルギーの最大限の節約と既に創造された文化財の最大限の活用を目的に掲げた自然な発展であれば、ウクライナ学術及び標準用語は全く別の方法、つまりロシア学術・標準用語の上層階部分をウクライナ語の一定の発音と文法による純粋な民衆的語彙の基本部分と調和した発展であったはずであろう¹⁸。将来ウクライナの知的上層社会がこの自然な道に歩みを進め、そこでウクライナ学術・標準用語が現在あるような狭量な民族自

己規制と分離の道具であることを止め、地方造語者の実験活動の場であることを止め、共通ロシア文化、実際に大ロシア個性と対等で同価値のウクライナ個性を包含した真の大文化を創造する道具となるように、期待しなければならない。

最後に、私は二つの誤解を解いておきたいと思う。ドロシェンコ教授は民族人口とその民族の中で生まれる有能者数の正比例についての私のテーゼに有感している。彼は、「周知の限りでは、ある民族の数の多さはその中から有能者を大量に輩出する条件とは決してなっていない、逆のことも同様である」と述べている。私はそうしたことを彼が述べた形では決して主張しなかった。私は、「当該文化の担い手の数が多くなれば、＜他の条件が同じであれば＞その文化の担い手の中から有能な人々が誕生する絶対数が増加する」と述べたのである。括弧で強調した＜他の条件が同じであれば＞という表現は非常に重要な意味を持っている。この表現がなければ私が述べたテーゼは不正確なものとなるが、この表現があるのだから議論の余地はない。この場合には、私のテーゼは全く妥当である。なぜなら、全ての他の条件（つまり人種的資質その他）を変化させずに維持したままで、当該民族としての文化の担い手の数をまさに減少すれば、とすることを問題にしているからである。

もう一つのドロシェンコ教授の有感は以下の二つの表現で示されている。一つは、「トルベツコイ公爵が自己認識の正常な発展と言う言葉を一体どういう意味で理解しているのかが分からない」、そして、もう一つは「なぜ、そのような発展が文化創造における自己規制に結びつくのか」というものである。第一のことにに関してだが、どのような自己認識形態を正常なものとして私が認めているかは、おそらく、私が先の論文で述べた内容から結論は十分明らかでしょう、と答えておく、ウクライナ人にとってそれは何よりもまず自分たちがウクライナ人だけでなくロシア人でもあること、ロシア人だけでなくウクライナ人でもあること、ウクライナ性の無いロシア人はあり得ないこと、なぜならロシア民族個性が現実に存在している場所は外ではなく、大ロシア個性・ウクライナ個性・ベラルシア個性などのそれぞれの個性化の中のみだからである。第二の疑問についてだが、私は自己規制について何ら言及していない、そして私が正常と見なす自己認識とはまさに自己規制に結びつかぬものであると回答する。なぜなら、そうすればあらゆるウクライナ人は、一方では、自分の創造物が共通ロシア文化の宝庫に入るのかウクライナ文化の宝庫に入るのかについて迷わず自由に創造する可能性を持てることになるであろう、他方で、他の創造者が（大ロシアかウクライナか）どこで生まれ、如何なる両親からの出生か、ロシア語以外にウクライナ語等でも書き物をしてきたかについて履歴表やパスポートによって調べ事をせずとも創造物を活用することであろう。

18 換言すれば、ウクライナ人には、かつて大ロシア人が教会スラブ語を使用していたように、ロシア学術標準語を使用するのが最も自然である。そうした方法のプラス面については私の論文「ロシア文化における共通スラブ要素」（拙著『ロシア自意識問題について』に所載）を参照のこと。

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 84 March 2015

CONTENTS

Translation of Trubetskoi's works 4

Yuji YOSHINOCHI 19

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2 0 1 5